

---

# 不老不死の活用方法？

Flugel

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不老不死の活用方法？

### 【コード】

N5899N

### 【作者名】

F1uge1

### 【あらすじ】

神様の暇つぶしに巻き込まれ、チート能力をえられ転生した者達。

その中で、不老不死の身体を得て、マイペースに生き延びようとする少女？の物語。

(注) しばらくは原作のげの字も出ません。また、主人公は若干変態の気があります。ご了承ください。

この作品は、SSS検索・投稿掲示板Arcadiaにも投稿しています。

2011・08・13 五話までの内容を改訂しました。

## オリジナル登場人物設定

オリジナル登場人物設定  
本SSにおける独自設定、登場人物の解説です

『完全なる世界』：主人公達の勢力。有能な者が多いが、それと比例するように変態成分も多め

### ・ソウ

本SSの主人公で転生者

外見は蒼髪蒼眼の小柄な美少女。髪型は腰ぐらいまでのロングで、ポニーtailみたいに結っている

胸は大き過ぎず小さ過ぎずのサイズ。フタナリ。若干変態。  
この世界への出現時期が、地球誕生の頃、だつたため、地球最古の存在。生き字引？

邪神とは喧嘩友達、かもしれない

いつの間にか奉仕種族まで発生させてしまつて、着々と人外への道を歩みつつある。

また、世界各地に賢者伝説を残してしまい、民間伝承ではあるが信仰されてもいる。

チートスキルは

心身の完全制御・身体機能を完全に制御できる。感情面も一定の操作が可能。

魔眼：解析・再現能力を持つ。発動時は紅眼に。非戦闘系技能にも応用可能。

魅力（弱）：理性の薄い動物等に懐かれやすく、植物の栽培や採集にプラス補正。

式神×2：陰陽一対の式神を使役できる。学習して能力を成長させ

ていいくことができる。

普段着はゆつたりとした和服を好んでいる（若干動き易くなるよう  
に改良してある）

戦闘時は基本的に右側にイン、左側にヨウを纏つて、左右で相反す  
る力を用いて戦う

#### ・イン＆ヨウ

ソウに使役される陰陽一対の式神（識神）

世界の事象を識ることによつて成長し、それらを自らの力として取  
り込み、能力を強化していく

インは陰に属する能力（減衰・吸收・侵蝕など）を、ヨウは陽に属  
する能力（増幅・放出・破断など）を操る

成長次第では、その他にも光と影に繋がるイメージのある能力を、  
それぞれ扱える（光で退魔、闇で呪縛などなど）

普段は髪を伸ばした童女の姿をとる。その他にも、狼や鷹などの姿  
をとることも可能

外見は、インは黒髪（黒毛）蒼眼に暗色系の和服姿で、ヨウは白髪  
(白毛) 紅眼に暖色系の和服姿

色が違うことを覗けば、見分けがつかない、双子みたいな存在  
性格は、インが物静かなインドア系、ヨウは快活な行動派

戦闘時は変化能力を駆使してソウの武具として、または独立戦力と  
して戦う

#### 『竜種』

ソウ達が乗騎として育てていた竜たちの末裔にして、ソウに全力で  
仕える奉仕種族

個体ごとに吐くブレスの種類が異なり、炎や氷、雷等の他に、毒や石化なども存在する

進化の過程で魔力を取り込んでおり、魔術を使うことも出来る  
外見は物語に出てくる翼（リンドブルム）ある竜のようだが、

体型は個々で異なり、極端な例では東洋の竜の様に首や胴、尾がすらりと長い者なども居る

頭部、手足の先などは頑丈な鱗に覆われているが、

首や胸元など蠶、羽毛が生えている所もあるため、抱きつくると結構ふかふかして気持ち良い

コミュニケーション手段は、鳴き声と魔術による念話

後に、魔術を用いて人型を取れるようになり、普通の会話も可能になつた

寿命は千数百歳くらい。稀に数千年生きる個体が現れ、長老、翁等と呼ばれている

ちなみに、主人公達の影響で日本人っぽい名前の者が多く、暮らし方も純和風

『完全なる世界』結成後は『裏界』の管理を任せられている

#### ・千歳（雷竜）

160歳（人間換算10歳）くらいからソウ達に連れまわされていた竜種の少女

数百年かけて扱かれた結果、長老衆に次ぐ実力者に

涙目の表情が襲いたくなるほど可愛いらしく、良く弄られている

『完全なる世界』結成後は、マイペースな主人公の秘書役を頑張つてこなしている

#### ・遙樹（木竜）

3世紀の頃で一千百歳くらいの竜種の長老

結構お茶目な爺さま、他の竜達からの信頼も厚い纏め役

・仔竜×4

まだまだ幼い仔竜四体。いつも仲良く四人一緒に遊んでいる  
一応設定されている名前はそれぞれ、透（風竜の男の仔）、雅人（  
木竜の男の仔）、御影（闇竜の女の仔）、晶（地竜の女の仔）

『獣人・亜人族』

主人公達『完全なる世界』によって創造された新たな種族、その1  
煩惱と人手不足解消目的という、ある意味趣味と実益を兼ねた研究  
によつて誕生した魔法生命体

初期は命令をこなすだけの人形のような存在だつたが  
どんどん改良され、ヒトと殆ど変わらぬ自我を持つに至つた  
研究者達の無駄なこだわりから、美少女率が高く、男より女の方が  
強い。以下戦闘能力の簡易比較

美少女・美女 < 少女・女性 < 幼女・男の娘・老女 < 越えられ  
ない壁 < 紳士 < マッチョ < 青年 < 少年・爺

獣人と亜人の間に本質的な差異は無く、動物的特徴（獣耳や鉤爪、  
肉球等）の強い一族を獣人族

それ以外の特徴（エルフ耳や2本以上の腕を持つ等）の強い一族を  
亜人族と呼んでいるにすぎない

現在は『魔法界』『裏界』の開拓者として生活している

『自動人形』

主人公達『完全なる世界』によって創造された新たな種族、その2  
獣人・亜人同様に、煩惱と人手不足解消目的から誕生した、文字通  
り自ら動く人形である

この世界初のメイドでもある。そのため、女性しか存在していない  
共通規格のボディの各部を目的に合わせて換装でき

‘主のいかなるご要望にもお応え出来る、が謳い文句

人工知能の開発が難航し、不完全な頭脳を積んだ試作型も存在したが  
人工知能完成後は、順次アップグレードを行つており、順調にその  
数を増やしている

基本的に、戦闘メインの『戦うメイドさん』と日常メインの『御奉  
仕メイドさん』の2系統に分類できるが  
主目的である事務の人手不足解消のため、『御奉仕』系の方が多く  
なっている

また、名前は花・植物由来のものが多い

- ・ サクラ

完成した魔術式人工知能を積んだ侍女式自動人形第一号

犬耳カチューシャとシンプルなエプロンドレスを纏う、小柄な『御  
奉仕メイドさん』

他者と触れ合い、経験を積むために、他の職員のサポートを受けな  
がら、事務の受付で仕事している

感情面が未発達で無表情気味だが、生まれたばかりのため、無垢で  
様々なことに興味津々

仕事が無い時は、近くに居る誰かの後を付いてまわり、何でも真似  
ようとする

事務班のマスコット的存在として、今日も癒しを振りまいっている

仙人界：中国奥地に暮らす、氣を応用した仙術を行い、限定的なが  
ら不老不死に至った仙人の勢力

- ・ ナタ  
  ??

転生者。チート版？？として誕生し、正史通りに一度死亡

蓮の化身として真つ当に復活するところを、主人公達の介入で魔改

造された

以下はそのスペック

・チート能力（怪力・再生能力などが確認された。本人が黙つているので詳しく述べは不明）

・眼からビーム発射可能

・魔改造風火輪<sup>ふうかりん</sup>で陸海空を結構自由に移動可能

・手首をドリルに変形可能

・肘から先をロケットパンチとして飛ばせる（乾坤圈<sup>けんこんけん</sup>の機能を内蔵した）

・骨格を組み替えて、戦闘機や戦車に変形可能（戦車砲や装甲などは宝貝が変形して担当）

・支援メカ宝貝（ガンムXのGファコンみたいな奴）と合体可能  
変形時も合体可能。変身時は似合わないから、と合体できない設定に

・内蔵武器として、肩口に収納されているビーサーベルや胸部が開いて現れる大型荷電粒子砲

腕部には火炎放射、ペンシリミサイルが格納されている

・外見はぱっと見美少女の無表情氣味少年。若干長めの髪は赤毛で首の後ろで尻尾みたいに括つている

・通常時はリミッターがついている状態で、解除すると正統派魔法少女（笑）に変身する

変身時は核である靈珠（のダミー）が胸から顯れ、それが魔法少女の杖に変形？する

攻撃も、それらしいエフェクト（命中時や発射時にとか、のような発光、鈴の音のような効果音など）

が入るように設定されている（改造に掛かった時間の8割が、これに費やされた）

ちなみに、本来の変身である三面八臂は「可愛くない」という理由で削除された

敵味方がばんばん死んでいく封神演義の時代の中

人前でリミッターを外さずに済むように、必死に修行し、戦闘を行なっていたもの

最終決戦でやらかしてしまい、敵味方からの生暖かい視線に、居た堪れない思いをしたそうな今後も更に改造されるつぽい

## オリジナル登場人物設定（後書き）

他のオリジナルキャラや改変された原作キャラなども、登場し次第、追加していきます。

2011・07・14　主人公勢の設定を改訂版に修正。

## プロローグ・テンプレ的な展開（改）（前書き）

この作品には原作崩壊・キャラ崩壊が存在する可能性が在ります  
また、作者の独断と偏見による解釈・描写が多く存在します  
これら及び、転生・チート・オリジナル主人公といったものに興味  
の無い

または、許容できない方はプラウザの「戻る」ボタンで引き返して  
ください

それでも構わない、という方は  
しばし、この作者の駄文にお付き合ってください

## プロローグ・テンプレ?な展開(改)

プロローグ・テンプレ?な展開

極々平凡に生きた一人のオタクが死んだ。

アパートでの一人暮らし。最低限稼ぐためのアルバイト以外は部屋に引きこもり、

不規則な生活リズム、不摂生な食生活を送っていた彼は身体を壊し、現実に親しい知人が居ないことから独り衰弱し、あつさりと息を引き取った。

享年28歳。

その魂は、神様の気まぐれから、輪廻の輪に加わることなく狭間の世界へと招かれた。

「……めなさ…………よ……覚め…………」

ん? 誰かが呼んでいる……?

呼び声に導かれ、茫然と漂っていた意識が徐々に覚醒に向かって浮上していく。

「さあ、  
よ……目覚めなさい」

何度も田かのその呼び声を、ようやくはつきりと認識し、重たい瞼を開くと

田の前には、今まで見たことも無いような美少女が浮かんでいた。

「これは、夢……か？」

自分にはまるで縁も無いと思われる美少女が、自分を田覚めさせる（そもそも宙に浮かんだ状態で）などという頬を抓りたくなるような状況に、半ば夢見心地のまま、心中でポツリと呟く。

「夢ではありませんよ」

喋つていらないのに返事が返ってきた？……何なのこの人？

「いえいえ、ただの暇してる神様です」

かみ、さま？……お上、髪、紙、加味、噛み、咬み……神？  
まさか、自分=神だと言いたいのだろうか？　この人、頭が逝つちゃってるんじゃないの？

まだあまり回つていらない頭の中で、‘かみ’に符合する文字を並べながら思う。いくら美少女でも、あまりイカレタ人とはお近づきになりたくは……でも美少女だしなあ。  
あれ？　今のも口に出してなかつたはずなのに、会話が成立している？

「信じてませんね……しかも人のことを逝つちゃつてるとか、イカレタ人だと酷い言い草ですね。」

それに、喋つてないところよつは喋れない、と言つ方が正しことと思いますよ。

今あなたは魂だけの存在ですか？

え？…………なんと、仰いました？ 今……

今信じられないことを笑顔でさらりと言わなかつたか、この人？いやいや、まさか、そんな、ねえ……

「おまえはもう、死んでいる……

それでね、あなたにちょっと異世界に転生してもうあいつかと思つて」

儚い希望を持つて聞き返してみたが、返ってきたのはなんというか、どつかで聞いたような台詞とイイ笑顔。慌てて自分の身体を確認しようとするが、認識できるのはほんのり白みがかつた蒼い炎だけ。

マジだ、なんか身体を見よつとしても、蒼白い炎が見えるだけつて、人魂状態かよつ！！

ネットで見かけるような転生系いうやくある神様の手違え、と、か……

そんな訳無いですよねーあははは……は、は、はは……

「うん、あなたは普通に生きて、寿命に則つて死んだから」

じゃあ、なんで？

「転生とか考えていた時に、ふと、眼に留まつたのがあなただったから。

……ぶつちやけると、選び直しするのも面倒だったし

おーい……それでいいのか神様よー

自称神様の美少女の、あまりにも適當な対応に乾いた笑いが漏れる。神様とやらが何柱いるかは知らないが、こんなのはばかりだつたら宗教家が絶望するな。

いや、発狂するか？ そんなどーでもいい思考が頭を過ぎる。

「世の中こんなモノよ……ま、運が無かつたってことで諒めて」

それで、わたくしめにビービーしようと~

「貴方の居た世界の、漫画に良く似た異世界、その可能性の一つである平行世界に投げ込むから  
適当に原作ブレイクかましちゃつて……私はそれを肴に飲むから（  
ボソッ）」

あー、はいはい……それじゃ、何か能力もらえませんか？

ひ弱な現代日本人としては、何らかのチートスキルがないと生き残れない世界も多いと思いますし。

つて、どの世界に転生するんですか？

「チートスキルは別に構わないけど、どの世界かは気づくまでのお楽しみ……適当に頑張つてね？」

ちなみに、その世界には他にも何人か転生者を投げ込んでみる予定なので、頑張つて生き残つて。

で、どんな能力が欲しい？ 容姿の変更も受け付けるよ。

無制限はちょっとアレなので、容姿以外で、チート能力を5個まで許可しよう

よし、前々からちょっと興味のあった女の身体に……でもムス  
口と離れるのは寂しいので、

フタナリ少女にしてください。できればムス口のサイズはある  
程度変更可能に。

「……………本気?」

この際だからと、欲望全開で逝つてみた。

ついでに、あまり見かけないフタナリとやらを試してみようと思つて申請すると、

白い眼で見られた……呆れた、という感情がビシビシ伝わつてくる。  
だが、こっちも退けない。TS転生は男の浪漫……浪漫か?  
いやいや、こんな機会なんて早々在るもんじやない、逃してたまる  
か。

確かに子供からスタートの場合、現実問題として、イジメとか、ハ  
ブられたりとかあるかもしけんが

転生者としての記憶引継ぎや、チート能力があれば耐えられるだろ  
うし。

成長済みでのスタートなら、裸を見られるなんて、公衆浴場ぐら  
いしかないはず。

そう考えて発言(?)する。

本気です! だつて、身体を男女切り替えできるとかじや、在  
り来たりじゃないですか!

女の子と男の子、どちらも味わえるお得ボディ……なんで選択  
する人が殆ど居ないんですかねえ?

「……………ま、まあ、いいわ……それで、他には?」

サラサラの蒼髪、ついでに蒼眼で、綺麗といつより可愛い系の小柄な身体で、

できれば胸も、若干あるとうれしいかも。美乳って感じで……

あと、鍛えてもあまり太ましくならない身体にしてください。

あ、ファンタジックな髪や田の色が無い世界の場合は、黒髪黒眼でお願いします。

自分の好みの女の子をイメージしてお願いしたが、良く考えたら、これ自分の身体……ま、いつか。

さてと、チートスキルはどんなにしようかね？

「ふむふむ、意外とまともね。じゃあ、能力はどんなにする?」

「うーん…………心身の完全制御能力ってできますかね？」

自分の身体を、意図したとおり、齟齬無く運用できて、身体の無意識の活動、

治癒とか身体の代謝とか、あと神経系に干渉することができて、感情の抑制や、意識の加速、分割も出来れば良いな……なん

て……

「欲張りすぎじゃないの？ それは……」

その能力を一つの枠で取りたいなら、能力使用後の反動とか制限を設定しないとダメね。

まあ、分割思考や高度な身体操作については、

一般的な肉体でも出来なくはないことだから、反動は無しでも良いけど、

例えば……思考加速を行った場合、神経系へ負担をかけるんだから、

使用後しばらく行動不能になるとか、

治癒の速度を速める場合は、負傷部位を活性化させるわけだから、速めた分だけ痛みが増すとか、

体力を消耗するとか、そんな感じね」「

やっぱり制限付けないとダメですか……

細胞分裂や老化を制御できれば、擬似的な不老不死も再現でき  
て、

意識加速や分割系能力もついでに取得できると思つたんですが  
それでは、枠が余つたら反動無しで、余らなかつたら反動有り  
でお願いします。

「……老化や治癒に関しては、多少は制限を緩めましょう。  
長生きしてもらつた方が、こっちとしても楽しめそつだしそれ  
で、次の能力は?」

動植物とか、居るなら精霊とか、そういうモノに好かれやす  
くなる技能って出来ませんか?

野生動物とか精霊と戯れることが出来たら楽しそうですし、  
幻獣とかとも居るなら仲良くなつたいですし……必要となつたら  
狩つて食べることになるんじょうけど。

それに、植物に好かれたら、食べれる木の実とか薬草とかを見  
つけやすくなりそうだなあ、と……

「うーーん、理性の薄い存在に対する魅力を付ければいいのかしら?  
人に対しても効果が出ないレベルで良いのよね?」

あーー、うーー、それは……い、いや、ちょっと、初対面で好  
意的に見られるくらいの効果を。

「はいはい、それで次は?」

解析系の魔眼を……物体の組成や、相手の動きが読めるモノを。あと、使いこなすのが難しい代わりに、習熟度次第では相手の魔法や能力の解析も可能で、

それを自分で再現できる、みたいな感じで出来ませんか？モノ造り、伝統舞踊などの非戦闘系技能の習得にも応用できる設定で。

あ、魔眼発動時は瞳の色が真紅に染まる、とか……

なんか、自分で言つて厨一臭すぎて死にたくなってきた、やつぱや三

「わかつたわ、発動時は真紅に染まる魔眼ねー……クスクス……」  
解、「了解」

アツ——！ やめて——！ 真紅の瞳設定は——！！

頭を抱えて（今は頭どころか、身体自体存在しないけど）『ロロロロ』と転げまわる。

自称神様は、イイこと聞いちゃった、と言わんばかりの、ホントに楽しげな表情でクスクス笑っている。

ハアハアハアハア……へ、変更を……せ、設定の変更を……

「クスクスクス……こんな面白い設定、誰が取り消すのですか！  
鏡を見る度に、自分の黒歴史と対面するがいいわ！」

フフフフフ、フッフッフッフッフ、アーハツハツハツハツハツハツ  
ハ——！」

ガハツ——！

た、確かに、要らんこと口走った俺の自業自得かもしけんが、死者

に鞭打つよつた真似をするとは……

こいつ、神なんて上品な存在じゃなくて、悪魔の類じやなかろうか。今の俺に身体があつたなら、おそらく、シクシクと漫画チックな眼の幅涙を流しているに違いない。

「アーハツハツハツハツハグツ！ ゲホグホゲホツ……あー、笑つた笑つた。

ま、高性能、但し習熟度制限有りの魔眼ね。これなら枠一つで済むわね。

それにもしても、伝統舞踊ね、そんなのにも興味があるんだ

そこまで笑わなくとも…………まあ、モノ造りに応用できれば、便利道具作成も可能になるでしょうし、

作中に出でこない民族音楽とか、踊りとか、意外と面白そうですからね。

「いいでしょ。それじゃ、魔眼の習熟度について、

Lv1では相手の動きが少し先読みできるくらい。

Lv2で先読み能力の向上に加えて、魔法や体術などの初級技能の解析が可能に。

Lv3で中級技能の解析、初級技能の再現。

Lv4で上級の解析、中級の再現。

Lv5で最上級の解析、上級の再現。

LvMAXで最上級の再現が可能になるつて感じにしましょう。

RPGのLv上げみたぐ、Lvが上がる」とこ伸びにくくなる設定で。

モノ作りなんかについても同様に。ただ戦闘系より伸びやすくしくわね

分かりました。

えーっと、残り二つか……折角だから、汎用性を追及しまくつてみよう。

ということで、残りの二つの枠で、学習して成長し、能力の幅が広がる式神を一体お願ひします

「具体的な能力はどんな感じにするの?」

基本人型で、初期能力は無機物への変化のみ。  
実物を見れば、動物等への変化も可能に……  
あと、黒と白の一体で対になつていて、

黒い方が陰、マイナス、負、影等のイメージに関わる事象を學習、蓄積して能力を取得します。

白い方が取得するのは、陽、プラス、正、光といったイメージに関わる能力ですね。

戦闘時には変化能力でオレの武器になつて、もしくは援護役として戦う感じで。

育て切れば相当なチートですけど、最初が激弱なんで見逃してください。

「それは確かにチートね……確かに最初は激弱だけ……うーん、やつぱり制限を掛けます。

この二体の能力で起こした事象は、対になつたもう一體の能力で辻褷合わせをしなければならない

例えば、黒で冷却したら、白で加熱しなければならない、  
熱量を奪った  
放出

うつむ、流石に代償無しで、無茶苦茶なチートは無理か……まあ、枠一つ分だしな。

複数の枠を使えば中二病ちつくな『E.F.B』や、もつとえげつない

能力を乱発可能にできるんだろうけど、

この式神上で『EFTB』を再現しようと思つたら、その後に、炎の嵐を巻き起さなければならぬのか……

なんか、かなりはた迷惑な能力になつた気が……

「そうよ。対になつた能力が足枷になるから、片方だけ能力を取得しても、まともに使えない。

もし無理に使つた場合は、何らか代償を支払つてもらうことにします。

体力・魔力の消耗や身体、精神へのダメージなどなど……代償は、起こした事象の大きさに比例して、重いものになるよう設定するわね。

一応、一定の割合／時間で反動を分散させ、一度に受ける負荷を減らせるようにしておくけど、

多用して積み重なれば相当な負担になるから……気を付けることね

「了解しました。あ、結局枠は余らなかつたので、心身の制御の反動は有りつてことでお願いしますね。

「はいはーい。それじゃ、確認するけど、フタナリ可愛い系美少女で、

心身の完全制御（反動有）、理性の薄い存在に懐かれやすくなる魅力持ち、解析系の魔眼持ち、

成長する式神一体の五つのチートスキル。これで問題無いわね？

それで、いつごろに行きたい？」

あ、はい………………されでは、地球誕生の頃に。

「………………は？」

いや、星の誕生や古代の生物を実際に見る機会なんて普通無いですしね……折角のチャンスなので。

それに、式神に学習させる際に、実際に氷河期とか体験させたら、

より強力な能力を取得できそうだなー、と思いまして。

「ホント変な子ね……いいわ、簡単には死ないでちょうどいい。式神を上手いこと使って、身体の潜在能力を全開にして、魔眼を活用できれば、

何とか生き延びれるかもしないし……

まあ、いきなり過酷な状況からのスタートだから、そこそこ成長した身体にしておくわね

じゃ、新しい人生頑張ってね？ 逝つてらっしゃーい

あれ？ そういえば、地球誕生の頃つて、大気のある場所なんて存在しないし、

いきなり宇宙空間に放り出される訳だから、思いつきで言つてみたけど、俺、一体どうやって生き延びれば……そんな今更な思考をぶつた切る様に、俺は……足元？ に開いた穴から落下した。

一気に手を振つている自称神様の少女の姿が遠ざかっていく。

何で人魂なのに落下するのーー？

それが、狭間の世界での最後の記憶だった。

続く？



## プロローグ・テンプレートな展開（改）（後書き）

ほとんど、いつの間にか手を出したことが無いので描いてるのか  
と思います

更新速度もゆっくりしたものになっちゃうですが、どうぞ長文にお付  
き合ってください

2011.07.11 改訂

一部の設定を変更して、中途半端だった内容を加筆修正しました

## 1話・初つ端から命がけ（改）（前書き）

さて、主人公が落とされたのは、地球誕生間近の小惑星や、ガスなどの集まる渦の傍。

さあ、物語の開幕です……どうぞお付き合いください。

## 1話・初つ端から命がけ（改）

### 1話・初つ端から命がけ

意識がハツキリした時、私は小惑星？ や隕石？ が渦巻きながら一つに纏まつっていく空間を掛けて、一直線に落下していた。

巨大な岩や氷の塊が高速で飛び交う様は、生半可な絶叫系アトラクションなど目じやない恐怖だ。

空気が無いため、遠距離の物がぼやけたりしない宇宙空間では距離感が掴みにくく、

遠くで点のように見えていた物が、数秒もしないうちに目前に迫ってくるという状況は、神経が削られる気分だ。

自分の考えと齟齬無く動くこの身体のおかげで、手足を叩きつけるように隕石を受け流し、

辛うじて直撃だけは免れているが、無理な受け流しによる手足の負傷に加え、酸欠になりつつある。

また、真空中の極端な温度差、宇宙線、体内との気圧差でもダメージが蓄積しつつあり、

治癒の副作用による痛みの増幅のおかげで意識が飛びそうだ。もう痛いと言つよつ、焼け付くような感じで……死がどんどん近づいてくるのが実感される。

（マズッ！！）そのままじや押しつぶされる… それ以前に、空氣

が無いのでマジで死ぬ！！

半自動で治癒が働いているおかげで身体はまだ保っているけど、脳がやられたら終わる！！

えっと、今使えそうな能力は……式神？　どうにかして安全地帯を確保できなかー！？）

と、主人の危機意識に反応したのか、白と黒の一対の符が現れ、ポンッ！　と音を立てて変化。

私を取り囲むように、大極図みたいな球形の結界にを形成する。

しかし、内部にも空気が無いので、肺の機能を操作。

肺の中に残っていた呼気に含まれている酸素の残りを、赤血球で必死に取り込み、

無理矢理二酸化炭素を体外へ放出する。

しかし、焼け石に水……このままでは、酸欠で死亡「する」のは免れない。

隕石に轢かれ、弾かれて跳ね回っている結界内で、酸欠気味故に上手く働くかない頭脳を必死に回転させる。

周囲で使えそうなものが無いか、魔眼を発動させ、調べてみる。レバ1だと少々厳しい内容なのか、

発動の負荷によって眼球周辺の血管が切れたらしく、血涙が頬を伝つた。

幾度かの解析失敗の後、隕石同士の衝突で起こる高熱による融解と、水素を主成分とする分子雲での核融合反応が確認できた。

この中で今利用できるのは、核融合反応くらいのものか……

ということで、魔眼を全力起動し、反応を詳しく解析、その内容を式神に学習させていく。

エネルギーを発すると直ちに、どちらかと言えば陽の領分、になるのか？

でも、対となる反応として思いつくのは核分裂反応だ。

分裂と融合で陰と陽を分けるとすると、融合は陰になる？ 気がする。

まあいいか、とりあえず反作用でのダメージ覚悟の上で核融合の反応の再現して、

早く酸素を手に入れねば……

陰《黒》の式神を介して結界内の分子雲の密度と温度を高め、重力収縮を起こしていく。

重水素の核融合によつてヘリウム<sub>3</sub>が生じ、徐々に軽い元素から重たい元素を発生させていく。

まだしも、の上がつていらない魔眼での解析では不十分だったのか、数多の試行を繰り返し、幾多もの失敗を重ねて、ついに酸素原子の生成に成功！

ようやく結界内に酸素が満ち始めた。

分子雲の重力収縮の影響、核融合反応で生じた放射線での被爆、及び式神使用の反動によって、

襤褸雜巾の様になつた身体は、治癒能力を加速させた反動での痛みの増加もあつて

もはや痛みや熱さ等の感覚が無くなってしまった。

どうやら神経感覚の許容範囲を超えてしまい、すっかり麻痺してしまつたらしい。

改めて体内の状況を確認すると、遺伝子を修復しきれずにあちこちで癌細胞が発生してしまつていて、

仕方が無いので、細胞分裂や血流のルートを制御して、癌細胞を人為的に壊死させることで対処。

しかし、まだまだ不足している酸素を生成するために核融合を続けているので、

身体を治しても、すぐに放射線で焼かれてしまい……なんというかイタチ「こ」になってしまっている。

ただ、結界内を大気で満たすことが出来れば、  
せいぜい二酸化炭素の分解と酸素の生成を、酸欠にならない程度に  
やればいいだけだから、

治癒と被爆のエンドレスリピートからは抜け出せるだらう。

確か、新生代の地球の大気組成は窒素約八割、酸素一割で、  
アルゴンや二酸化炭素などが一分以下だつたかな？

少量のアルゴン等は無視しても良かつたはず。

酸素濃度が高すぎても人体に悪影響が出たはずだから、  
結界内の窒素濃度が全体の七〇八割、酸素濃度が一割程度になるよ  
うに、

やはり何度も失敗を繰り返しつつ核融合で生成する。

おおよその感覚で一気圧の合成大気で結界内を満たすと、  
安堵のあまり気が抜けて、ペタリと結界内に座り込んでしまった。  
そのまま大の字に寝転んで、深呼吸を繰り返す。

一段落ついたと言つても、未だに外は隕石の嵐で、結界はガツンガ  
ツンと乱打されて居り、

ピンボールの様に跳ね回つてゐるのだが……  
ま、身体制御で三半規管を調整して居るから、酔う心配は無い。  
精々、振動と激突音が煩いくらいのものだ。

「ゼーはーゼーはーゼーはー、げふつ、じほつ……

すー、はー、すー、はー……いや、マジでスタート直後に死ぬとこだつた。

肺の中に空気が入ってなかつたら詰んでいたな……

あれつて、神様（自称）の最後のサービスだつたのかな？式神の変化のバリエーシヨンに、俺が設定し忘れていた結界機能も登録していくれたみたいだし。

やつぱり、武器ばっかりあつても駄目だな……今後は防御も充実させるようにせねば。

まあ、これで一息つけ……あれ？ 何か星の中心に巻き込まれかけたね？ 私

寝転がつたまま、半透明の黒と白の結界の壁越しに外に意識を向けると、

先程までに比べて、周囲に存在する隕石の密度が高まつていいのよいに見える。

衝突の頻度も上がつていることから、形成されつゝある地球の中心のほうへと結界が流されているのは確実なようだ。

恐らく、原始地球の引力や周囲の小惑星や氷、塵との衝突、ガスなどの星間物質の流れの影響だろつ。

やつと一息つけたかと思ったら、次から次へと……もう少しゅつくり出来る時間が欲しい。

きちんと能力の確認も出来てないのに……

まずは、球形の結界の形状を一部変更。

地球の中心となる渦の方へ向けて、漏斗のよつた形を設定する。

そして、その漏斗の中で核融合反応を実行！

漏斗の広がつた方へと核爆発のエネルギーが集中して、大きな推力

を生み出す。

機動戦士ガ ダムシリーズ等で出てきた、核パルスエンジンを真似た簡易ブースターである。

仕組みがシンプルなので試してみたが、地球のほうへと流れる小惑星などへの衝突が多発。

迷走してしまって、まともに距離が稼げなかつた……

ということで、今度は人型のパワードスーツをイメージする。

身を守るための装甲と、動作を補助するための筋肉モドキのついた宇宙服のようなもの。

筋肉モドキは自分の身体を解析して、式神に学習させた。

隕石を殴つたり、蹴つたりできるように手足の装甲は分厚く設定。また、弾き飛ばすための腕力・脚力を補うための筋肉モドキのせいもあり、

胴体に比べて手足が肥大した、アンバランスで歪な影。  
なんというか不恰好なフォルムに愚痴がこぼれる。

「う～む……このかつこ悪い外見は、できればどうにかしたいものだが……」

今は生き残ることを優先しないとマズイしな……後回しか

そうして、近づいてくる隕石等に対処しつつ、危険エリアからの脱出を開始する。

小さい氷塊などは手足の装甲板で受け流し、自分より大きい小惑星などは一旦しがみ付いてから、反対側へジャンプ……

弾いたり、受け流したり、飛び移つたりと紙一重の回避が求められ

る状況に、気の休まる時がない。

魔眼で多少は軌道の先読みが出来るので、早めに対処が可能な一方で、

自分の置かれている状況＝安全地帯など殆ど存在しないといつ」とも理解できてしまう分、

なんというか……気が滅入る。

激しい運動を始めたことで、酸素の消費が増えたため、酸素の生成にも思考を振り分ける。

酸素と炭水化物からエネルギーを取り込み、水と二酸化炭素を放出する代謝。

それを陽《白》の式神に学ばせ、陰《黒》の式神で反転、大気生成の際の核融合で得た熱量で 水 + 二酸化炭素 酸

素 + 炭水化物 を実行。

なんというか、かなり無駄の多いやり方な気がする。

直接エネルギーを体内に取り込むことができれば、呼吸する必要は無いんじゃ……

でも、そこまで行つたら、もはや人間というか、生物と言えなくなつてしまつ気がする。

でもまあ、今はまだ手が離せないので、これも後回し。

ガンガンと降り注ぐ岩やら氷やらを殴り、蹴り、弾き、受け流して

たまに思考分割が乱れて隕石に轟かれたりしながら、地球の中に取り込まれないように直走る。

やはり、地球の数倍はある星間物質の渦を、この身一つで抜け出そうというのは、

いくら身体能力を底上げしていてもキツイものがある。

⋮

なんとかかんとか、必死に生き抜きながら、時が流れた。

半年経過

初つ端から活用しまくっていた魔眼が、気づけば「△○□」して

周辺の解析の際に感じる負担が減ってきた。

嬉しい。  
隕石の軌道の見せりの精度も上がっているのが実感でき  
なんが

式神にも意識が芽生えてきて、棒読みながらも回避時のアドバイスをしてくれるようになった。

ハ「レトロ」ツ形態も色々と使い難かった点を改廻していくので初期のものに比べると、かなり洗練されたデザインに……カッコイイは正義！

そうして半年もの間、必死に安全苗穂を目指して駆け抜けてきた甲斐あって、

四三九

だいぶ周囲の危険物の密度が下がつてきた。

我ながら、よくもまあたつた独りで命懸けの弾幕ゲームを、これだけ長く続けられたものだと思う。

「ぬしやが、みせかえからみつつきます」

「はーつ、なつ、とおつー」

### 数年経過

回避についての助言や、極限まで発動中の生存本能のおかげか、身体の効率的な動かし方を習得してきたようと思つ。

分割思考にも大分慣れで、一→三分割は無理なくできるようになったて、

式神と無駄な会話をする余裕も出てきた。

最近では、周囲の星間物質を取り込んで噴出するスラスターも装備されたことで、

迫つてくる隕石を敵に見立てて、ガダムジットに興じている。

「見えるー、私にも隕石の姿が見えるーー！」

「わーーー、ぱちぱちぱち」

### 十数年経過

単純作業の繰り返しのせいか、魔眼の「v」が上がらない。

ここのことひ、地球の元となる渦＝星周円盤の外周部に居るため、隕石に襲われることもかなり減ったからだ。

たまに地球軌道から流されかけるが、それ以外は平穩な日々を過ごせている。

おかげで、星が出来上がりしていく様をのんびり間近で観賞できる。なんというか……ホントにスケールがでかい。

こんなものを見てしまうと、人の小ささが、思い上がりが良くなからう。

「世界は……宇宙は大きいね。

ヒトは、この域にまで辿り着くことは出来るんだろうか……？  
登ることが出来たとしても、どれほどの時間が掛かるんだろう……

……」

「はい、主様……嘗て主様が居た時代、その更に数千年以上先の時代」

「それでも辿り着けるかどうか……」

「……ああ、ホントに大きい、な」

数十年経過

流石に飽きた。

スケールがでかいのは分かつていたつもりだったが、出来上がりそうになつてから、

地球の完成までがこれまた長い。

最近は窮屈な鎧から大極結界に切り替えて、

漸く見つけた安定軌道上を周回しながらゆつたり過ごしている。

ただ、余裕ができたせいで、空腹に悩まされている。

太陽光の熱量を利用しての代謝の逆反応を行つてゐるから、別に食わなくても死にはしないが……なんと言うか、きつい。

核融合等で生成できるのは、塩や水といった簡単な構造の分子ぐら

いのもの。

空腹を満たすには物足りない。

しかし、水と光で酸素と炭水化物を体内で生成して生きている自分が  
つて、  
なんだか植物みたい……

仕方が無いので式神 s と言葉遊び等で時間を潰している。

「ほし」「しふ」「つめ」「めんたい」「いろ」……

百年くらい？経過

やつと地球が形になった。まだ地表はマグマの海みたいな感じで、  
隕石もちょいちょい降つており、  
止まない嵐が吹き荒れて、人が住める様な環境じやないけど。  
式神 s のおかげで寂しさは余り感じないが、原作が何にせよ、これ  
から46億年は経たないと始まらない。

地球誕生の頃に、なんて言つた過去の自分をちょっとぶん殴りたい

or z

此処のところ、式神達に将棋やオセロなどを教えて、それで暇潰し  
としているが、  
思考加速で分析・予測しても、最近はコンピュータみたいな正確な  
手を打ってきて、  
勝つのがかなり難しくなってきた。  
まだまだ子供みたいなところは残つてゐるが。  
ちなみに、オセロを式神同士で対戦させると、大抵の場合引き分け  
る……白黒の式神なだけに。

「あつ、それ待つたです、主様」

「待つた無し、でしょ？」

「そりそり、勝負とは非情なもの。はい、これで詰み」

「あああああ、また負けた」

### 数億年経過

地表も落ち着いてきて、最近は宇宙から地上に降りて過ごしている。が、大気組成が現代とまるで違うので、宇宙に居た時と同様に、宇宙服代わりの結界＆光合成が欠かせない。

月の形成の際の隕石激突「ジャイアント・インパクト」の時はホントに死ぬかと思つた。

久しぶりの巨大隕石の激突、……固まりかけていた地表を突き破り、溶岩やガス、碎けた地殻が宇宙に噴出し、月を形成する。いつもは外からの隕石だったから、地球側からの災害は対応に慣れていない分きつかつた。

必死に避けているうちに流されて、月の中に閉じ込められかけたのも、

今となつてはいい思い出、かな？

式神たちも、だいぶ個性がはつきりしてきた。

明るい性格のヨウ、物静かなイン。

……「いら、そこ、ネーミングセンス皆無とか言つた。分かれば良いんだよ、分かれば。

あと、能力育成のためにも、私の嘗ての知識をちよくちよく教えて

いたのだが、

それも此処まで来るとネタ切れ……殆ど（弱）が付く様な、頼りない能力だが、

これ以上伸ばすには実際に経験を積むか、本格的に研究するなりしないと無理だろう。

ただ、半分以上暇潰しとしてやつていた授業ができなくなつたのは、きつい。

また、試行錯誤しながら効率的な身体の動かし方を求めて、我流の鍛錬もしている。

某ハンター協会会長の真似事を、今後ずっと続けた場合、どんな感じになつてしまふのだろうか？

そんなことを考えて、挑戦してみてもいる…………時間だけは有り余つているからね。

それに加え、飯が食えないのは相変わらずだが、よつやつと、砂糖？を生成することに成功！

塩と水だけだつた食卓に砂糖が加わつた。いやつほーう…………つて私はバカテスの主人公かつ！！

ヨウなどは感激のあまり涙をだらだら流していた。

知識だけとはいへ、なまじ食事の素晴らしさについて教え込んでしまつた分、美味しい物を食べたいという欲求が、相当に大きくなつていったようだ。

「主様…………寂しい食卓に、よつやく、甘いものが」  
はな

「…………スマン、こんな寂しい食事につき合わせて  
だが、いつか必ず！ 豪華な食事に辿り着いてみせる……」

「はい、主様の居た時代の料理、期待します

「時間だけは腐る程あるんですから、きっと辿り着けます。  
不肖のこの身、料理のためなら如何様にもしてくれて構いません！  
！」

「よし、じゃあこの試作牛肉19826号、ちょっと食べてみてくれ  
若干組成が甘い気がするけど、意外といけるかもしれないし」

「はーー！お任せあれ。では頂きます……ゲハツ」（パタリ）

「マウツ！ しつかりして！ マー——ウツ——！」

「マズイッ！ 結界が歪む！？ マウ、しつかりしろ——！ おいつ  
！——？」

そういうえば、文字通り死ぬ氣で覚えた核融合による元素生成だが、  
下手に対人戦で使用したらとんでもないことになりそうだ、と今更  
ながらに気づいた。

弄れるのは、式神を介して、その上自分の周囲のモノに限られるし、  
世界觀にもよるが、単純な核爆発程度なら凌ぎ切れる奴も居そうだ  
が、

今のおままだと周囲への被害が怖すぎる。

どうにかして放射線を出さないよつこ、反応を制御できるようにな  
れば、某鍊金術師「」じができるかどうか、他の転生者をだませたりして  
便利かも。

そんなことも考えたので、安全な制御方法の確立のため、研究を続  
けることにした。

おそらく、複雑な構造の物は無理だろうが、  
簡単な金属製品くらいなら練成できるようになるはず。  
まあ、戦闘時は単純な構造の刃物や長物を造るのが精々だろうけど。  
そんなこんなで、更に時が流れる。

## 1話・初つ端から命がけ（改）（後書き）

原始地球の時代、変化に掛かる時間単位が億年スケール……  
ホントに時間だけは有り余っているので、遊び半分のモノも含めて  
主人公達は色々挑戦中。

そのうち、何も無いところからフルコース料理を出してしまえるよ  
うになるかもしません（笑）

思いつきに任せて、行き当たりばつたりに書いていたため、今回は  
どう主人公を生き延びらせるか、頭を抱えてしましました……結局  
大分無理のある内容に。orz  
今後は注意していきたいと思います。

2010.7.14 改訂

プロローグに続いて大幅に加筆修正しました。

基本的な話の流れはそのままですが、台詞や行動描写等を追加、一部展開を変更しました。

## 2話・招かれたる客、到来（改）（前書き）

原作まで、まだまだかかりそ‘うな感じです

恐竜登場が2億5千年前ですから……氣の長い話です。ホントに

では、2話の始まり始まり

## 2話・招かれたる客、到来（改）

2話・招かれたる客、到来

現在、原作開始まで大体40億年くらい？

ここは大雨が続いている。原始海洋が形成され始めている。が、どんなことでも限度というものがあり、スケールが半端無く大きいこの時代……

何らかの変化に遭遇して、最初は感動を覚えて、長々と続くことで嫌気がさしてくる。

今回は降り続ける雨、止まない雨……その前も良い天気、と言えるようなものではなかつたが、

薄暗く、ざあーざーと土砂降りが続くと、気が滅入つてくる。

そのため、最低限の鍛錬はサボつていながら、結界内に引きこもつて、研究に没頭する日が続いている。

最近の研究テーマは穀類・野菜の作成。

肉については、この間やつと、パサついて、味氣ないものだが、なんとか似たような物を作ることができた。

果物にも挑戦してみたが、砂糖が作れている以上、後回しにしても問題は無い。

セルロースから食物纖維を、そして、しゃきしゃき歯ごいたえのある野菜を……

「フフフフ……フハハハハハツ、ハーッハツハツハア——ツ」

「最近の主様、何か危ない人みたい（ボソ）」

「シツー！そんな本当のことを言つてはダメ（ボソボソ）」

原作開始まで38億年くらい？

原始の海で生命？ らしきものの発生を確認。  
最近は顕微鏡代わりにしている魔眼を発動しないと、まるで見えないサイズだけ。

ほんとに小さな細胞未満の、どちらかと言つと増殖する機能を持った分子の集合体。

そんな存在、だけどきっと、これが始まり。

「…………でも、微生物を見ててもお腹は膨れない」

「嘗てのマスターの世界の正史の通りに進むとしても

「多細胞生物の発生まで、あと30億年くらいかかるはず」

「それまでは、100%合成食品の研究しかない、か……はああ

――――

まだまだ遠き原作、それに伴う生命の進化を想つと、溜息がこぼれる。

ちなみに現在の主なメニューは、

肉モドキの塩焼き、砂糖から合成した澱粉によるパンみたいなモノ、  
笹の葉みたいな野菜モドキ。

なんというか……味気ない。

原作開始まで32億年くらい？

海中で色々とバリエーションが増えていたバクテリアの中に、藍藻を確認した。

これで光合成による酸素が……面倒くさい酸素生成ともこれでおさらば！

と、思つていた時期が自分にもありました。

藍藻はまだ数が少なく、海中に居るため、発生した酸素は海水中に溶け、または金属イオンと結合して沈殿してしまい、大気中になかなか広がらない

大気に薄くとも酸素が広がるのは、数億年は先になる見込み……ぬか喜びだつた。○□

ただ、葉緑体の光合成のやり方を参照にして、酸素生成の効率が改善できた。

しかし……確かにまともな物が喰えない、酸素も足りない現状ではかなり便利な能力なのだが、

なんというか、どんどん人から外れて逝つてしまつてゐる気が……

それから、魔力や氣と言つた不思議パワーについても研究を始めた。自分の得た能力について考えてみた時、死ぬ前の世界の法則では説明がつかないものが多く、

時間が有り余つてゐる現状、調べて置いて損は無いと判断したからだ。

高速治癒の際、どこから傷を埋める材料を？　どこから細胞分裂を促進するエネルギーを？

思考・反応速度強化の際、神経伝達を早める要素となつてゐるもののは？

魔眼での解析の際、この眼は何を観てている？　通常時は不可視の電磁波？

光を受けるだけでなく、蝙蝠のように何らかの波を自ら放つて反響定位を行っている？  
食事を必要としない式神の動力源は？　魅力とは？……数え上げればキリが無い。

説明不能の神様パワーでどうにかなっているのかもしそれないと、この世界が漫画の世界に似ていると言つ話なので、魔法的なものやオーラ等が存在する可能性は否定できない。そう考へると、自分たち転生者に与えられた能力も、ある程度はそれに沿つたものになつていると考えられる。  
そういう訳で、いろいろと世界に満ちる力、身体に備わっている力について、

魔眼で解析できぬか、インやヨウといった式神、つまり魔法存在とでも言つべきモノに取り込めないかと実験を重ねてみた。

この時期、様々なバクテリアがたっぷり存在するので、見つけた謎の力を注入してみたり、生物実験ちっくなこともやつてみた。やはり他者を観察できたのは大きかつたのか、最終的に魔力と氣、らしきエネルギーの存在を確認できた。

宇宙も含むこの世界には、大気や星間物質などとは別に、魔素と名づけたエネルギーが満ちている。  
私や式神sは、その魔素を取り込み、体内で使いやすい魔力に変質させて能力に用いているようだ。

これが判明するまでホントに長かった。

魔素を注入したバクテリア、魔力を与えたバクテリアなどで比較実験を繰り返し、

増殖速度がアップしたり、魔素に適合できずに死んだり、

魔力では短時間のドーピングにしかならないことが判明したり、

捕食能力が強化されたせいで、折角造った実験器具を食い荒らされたり……

そういうえば、魔素に適合しそぎて、そこらの魔素をあるだけ際限なく吸収して、

身体の方が耐えられずに、最終的に自爆しやがったバクテリアもいたっけ……

結界内で研究していたから逃げ場が無くて、あの時は死ぬかと思った。そう簡単には死ねないけど。

気については、生物の持つ生命力が元となっているっぽいことを除けば、詳しいことは全く分かつていない。

まあ、研究対象が調べ難い自分と、それに比べ極端に生命力の低いバクテリアだけだから当然か。

「さて、この魔力をどうにか利用できないか、実験を重ねることにしますか」

「主様！ 魔素獲得型バクテリア b0-sou が急激に増殖を開始。このままだとまた外部へ被害が！」

「なにい！ くつ……仕方が無い。玆ウ、今回は培地ごと焼却処分。イン、データはきちんと残してる？」

「はい、問題ありません」

原作までだいたい24億年

初めての大規模な氷期（ヒューロニアン氷期）の到来。

結界の外は真っ白に染まり、吹雪と海洋凍結によつて結界 자체がまるまる埋まつてしまつたことも……

また、これによつてインの熱量吸収能力の派生、冰雪系を獲得できた。

エターナルフォースブリザード！ 相手は死ぬ……まあ、しばらくはその相手もいないんだけどね。

マグマの海を体験させて留得させた、ヨウの熱量放出能力の派生、炎熱系と併せて、

取れる手札の選択肢を増やせたのはありがたい。

ついで、古代の雪を用いたカキ氷にも挑戦した。

外は極寒の世界、そんな中暖かい結界に籠つて冷たいもの。

それも、通常手に入らないような代物を食べる、といつのは中々に優越感を刺激される。

……自慢できる相手が居ないことに気づいて、少々虚しくなつてしまつたのは秘密だ。

でも、ま、美味しいカキ氷を楽しく騒ぎながら食べたから、良じとしますか

「主様！ おかわりつー！」

「……私もお願いします」

「はいはー」

原作開始までたぶん20億年

やつと大気中の酸素濃度が上がってきて、結界無しで過ぐせるようになってきた。

式神も人型を取つて、その識りたいといつ衝動からか、ちょくちょく冒険に出かけたりしている。

人型時、インは黒髪蒼眼の、ヨウは白髪紅眼の童女姿をとっている。なんというか、小さい子が駆け回っている様子は心が和む。

が、この時代に敵など居るはずがない、と氣を抜いていたのが悪かつたのか、

邪神さん<sup>招かれざる客</sup>がいらっしゃった。

ぼんやり空を眺めていたら、いきなり黒い巨大なものが降つて來たので、いつもの隕石か、と衝撃波を凌いだ後は意識から外してしまつた。

そこを、着弾したモノから生えてきたぶつとい触手に捕まつて、思いつきり放り投げられた。

「んにゃあああああああーーー？」

地面に勢い良く叩きつけられ、ズサーンと土煙をたてながら数百m滑り、転がる。

「げほげほっ、えほっ…………くそお、やつてくれやがりましたね、こんの野郎……

インっ！ ヨウっ！ 来なさいっ！ ……」

「はいっ！」

インとヨウを変化させ、右側に黒、左側に白を纏う。少々不安の残る防御を補うために、手甲、脚甲、胸当てを、そして、機動力を補うために一対の翼を……

さて、20億年かけた正拳突きの威力、得と見よつ！――  
氣の力をたっぷりと拳に充填。

そして、自分の力の実験台になってくれる貴様に、感謝の思いを込めて！！

「はあつ！・！・！・！」

ガツ！！！！！

触手の群をかいぐりつて、土手つ腹に呑き込んだ、音を置き去りにした一撃。

それだけで、相手の鱗が弾け、胴体にボンッと大穴が開き、その巨体を数百メートルも吹き飛ばした。

\$\_\\$&a\equiv p\cdot \% - \{ + \vee = | \{ \\_ \vee \* , (\vee \# ) \} ? \\_ \% -

— — — — —

なんとも形容しがたい絶叫。聞いているだけで、気分が悪くなつてく。

そして、土煙の中から姿を現したのは、表現しがたいオゾマシイナ二力。

強いて言ひなら、触手が一杯生えた、直立する大トカゲ……  
先ほどの一撃による傷も、触手がウジョウジョと埋めていく。  
見ているだけで精神力が削られていく気がする……おうつ  
ふ……

(へー、ハスターじゃないの)

いきなり頭に響く声……この声は、確か暇神ひまじん

(暇神は酷いわね……折角助言してあげよつと思つたのこ

そななことより、今聞き捨てならないことをちりつと口にしなかつたか、こいつ……

聞き間違いだと良いなー、といつ傍に希望を持つて改めて確認する。

「助言つて？…………それに、今さつきハスターつて……」

(そうよ、クトゥルー神話でお馴染み、風の旧支配者、名状しがたいもの、のハスターちゃんです)

「まんまヤバイ邪神じゃないですかっ！――

助言つてことは、弱点か何か教えてくれるんですかっ！――？」

(えーーと、とつあえず再生しなくなるまで呑き潰せば問題無し？)

（女じや弱点狙いでも効果は薄いし、今のが  
というか、地球人がつづける弱点らしい弱点なんて無いし、今の貴

会話？の途中で襲い掛かってきた無数の触手を殴って、蹴つて、かわして、もう一度懐に。

そして、恨み言と共に正拳突き一連

ドガガツ ! ! !

再び胴体にダメージを喰らい、雄叫びを上げ、触手や鱗の破片を撒き散らしながら、一キロ前後の距離を吹き飛ばされたが、ハスターさんは堪えた様子も無く、再生を始める。

「……………はああああ———」

長引きそうな予感にゲンナリしつつ、長いため息を吐く。

ハスターも居る「」とは、悪らくクトウルーザナイアルヲトホ元  
ツブ、

アザトースなんかも居るってことで、侵略がてらに地球にやつて来かねーい。

（うん、『想像の通り。連中の気分次第だけど、来る可能性は十分にあるよ。

あと、あんまり長く直視していると、SAN値直葬されるから、長引かせると不利だよ）

「…………聞きたくなかった」 〇 〇 〇

あんまりな世界に軽く絶望して、地面に突つ伏す……が、現状を思い出し、

必死に気力を振り絞つて、立ち上がる。

こんなところでリタイアできるか！ 一いつちに来てから未だにまともなものも食べれてないし、

動物達とモフモフも出来てないし……

と、不満、未練を思い起こして、無理矢理に精神を奮い立たせる。

（じや、頑張つて。二十数億年ぶりの面白イベント、きつちりクリアして私を楽しませてね？）

ハスターの方を見ると、多少は本気になつたのか、触手の周りに風を纏わせ浮遊し、

手足を振り回してはカマイタチを発生させ、周囲に無駄な破壊を振り撒いている。

言うだけ言って、さつさつと見物に回つたらしい暇神に呪詛の言葉を吐きつつ、

荒野での死闘が始まった。

相手の放つ巨大なカマイタチを、背の翼を全力でふるって回避。今の自分は効果が見込めそうな遠距離攻撃手段を持つていないので、相手の懷に入るしかないのだが、

風を纏わせて、攻撃範囲の広がった触手の群が邪魔をする。

風に巻き上げられた、小石や砂利まで襲い掛かってくるので始末に終えない。

もし生身で接触すれば、竜巻のような風と触手に轢かれてミンチになってしまっていただろう。

仕方無く、相手の手を減らすために、触手の中でも風の纏い方が薄いものから殴り潰していく。

SAN値的に、本体だけでも余り直視したくないが、

下手に眼を離すと攻撃を避けられずに直撃、ゲームオーバーになりかねないので、

吐き気を堪えながら、一本一本、再生しつつある触手を減らしていく。

……地味だ。かつこよく、なんて戦えない。

私は元一般人で、戦闘経験皆無なんだからしようがないだろう……

……私は誰に言い訳をしているのだろうか……

と、SAN値が削られ思考が負の方向に傾ぐのを、脳内麻薬をドパドパ分泌して、

強制的に躁状態にすることで対処する。

何度も触手を受け流し損ねて吹っ飛ばされ、

カマイタチにも自慢の髪の毛を半分くらい持つていかれた。

式神Sの鎧モードは相当頑丈だし、それで耐えられない攻撃に対しては、

ヨウの能力、斥力（弱）、で自分から反対側に跳んだりして受け流

す。

打撃はそれでどうにかなったが、カマイタチの斬撃はひたすらかわすしかなく、

また早くて見えにくい攻撃なので、結構神経が削られた。

腕を持つていかれかけた際は、治癒能力を高めておいて良かつたと心底思つた。

脳や心臓といった主要器官を一度に吹き飛ばされない限り、大抵何とかなる訳だし。

途中から実験段階だつた魔力障壁も試してみたが、

サイズの差のせいもあって、余り意味を成さなかつた。

あの巨大な力マイタチ相手では、一瞬は止めることができるが、すぐには突き破られてしまう。

……これが終わつたらもつと改良しよう。

結局、SAN値をガリガリ削られながらの戦闘は、半年にも及んだ。

打撃では効果が薄いのか？と思つて斬撃で一部ではあるがバラバラにしてみた。

が、すぐに断面から触手がウゾウゾ生えてきて、

バラされた破片同士が触手を絡ませ、元通りになつてしまつた。

周りの肉片の再生に巻き込まれかけた時は、

ヒトとして何かが終わつてしまつ、そんな恐怖に駆られて必死に脱出した。

あの触手地獄は…………もう！ 一度と！ 体験したくない！！

触手プレイは、するのは兎も角、されるのは真つ平ゴメンだつ！――仕方無しに、打撃で少しづつ圧殺していくた。

最終的に、インの、重力制御、で打撃の重さを弄つて威力の底上げし、

インの鎧を介して、熱量吸收、+ 打撃による氷結破碎、  
ヨウの鎧を介して、熱量放出、+ 手刀による溶断を喰らわせ、  
じりじりとハスターの巨体を削つていった。

…… 真逆の能力を同時に、それも全力で振るつたことによる負担はかなりのもので、

熱量を弄った手甲、脚甲の下は、制御の甘さのせいで火傷と凍傷でボロボロ。

それに、身体の左右で生じた温度差で、血流の流れにおかしな所も出てきている。

また、本来振るえない重さの攻撃を行つた負荷で、何度も脱臼したし、

折れたり鱗が入つた骨も少なくない。

戦闘終了後は、関節がシクシク痛んで全く身体を動かせない状態に……

鎧を纏つていなかつた所は、顔も含めて打撲と切り傷、擦り傷塗れ。それに、一度攻撃を受け損ねたせいで、左足は膝から先が千切れで、どこかに飛んで行つてしまつた。

相手の攻撃を見切るために全力発動した魔眼は、手数の多い相手のせいでの真っ赤に充血。

流石に、血涙まで行かなかつたけど…… 眼が疲れた。

SAN値の方も大分削られ、最後の方では脳内麻薬の反動もあって半ばノイローゼになつていた。

脳内麻薬分泌は、使いどころをミスると反動が洒落にならない。

効果が切れるごとに、躁状態から強制的に鬱状態に叩き落されてしまう。ヨウ達の励ましが無かつたら、ホントにやられていたかもしない。

ちなみに、身体の殆どを削られ、叩きのめされたハスターは……何故か金髪美少女の姿になつて、泣きながら逃げていった。

「あああ～～、もう、邪神の類とは、いろんな意味で戦いたくない」

「主様、お疲れ様でした。」

「初戦闘、初勝利おめでとうです。主様」

巨大な斬撃跡や、クレーターのような打撃痕の残る大地。この一戦で、すっかり地形が変わってしまっている。決着がついたという実感はまだ無いが、身体はもう限界だったようで、気がついたらぐつたりと倒れ伏してしまっていた。

式神sの温かい労わりの言葉が身に沁みる。

千切れた左足はヨウが拾つてくれたので、断面を重ねて高速治癒を開始。

大腿骨、神経、動脈、筋繊維を繋ぎ治していく。

壊死した部分を掌握、生き残っていた細胞を増やし、傷を再構成していく。

なんというか、この半年ですっかり慣れてしまった、

高速治癒の反動で増幅された痛みが、無事に、生き延びれたことを実感させてくれる。

インに膝枕してもらいながら、

今まで張り詰めていた心が解きほぐされていくのを堪能する。

「ああ……」

「しほりへは、私たちがお世話するので」

「ゆつくり寬いでください」

「「めん、ありがと…………それにしても、あの駄神めえ」

邪神のこととはもう考へたくない（SAN値的な意味で）ため、怒り（ハツ撃たりとも言つ）の矛先は暇神ひまじんへと向かつ。

「助言とか言つておきながら、役に立つことは何も言わずに見物とか……」

「あの声の主は神様なのですか？」

「それにしては、威厳も何も感じなかつたのですが

「まあ、暇だからと、死人を好き勝手に転生させるような神だから」

「「はあ……」

「それに、その方が面白いとか言つて、この世界のことを何も教えずに放り出すし」

しばらく愚痴つて、少々荒れていた気持ちを落ち着かせる。

それにもしても、と疲労ゆえに回らない頭で考える。

邪神が登場するつてことは、クトゥルー神話系ベースの物語？ デモンベントか？

いや、邪神が美少女つてことは、にゃ 子さん系かもしれない。でも、転生者が複数居るつてことで、その能力のベースとして、邪神が居る世界観が必要となつたのかな？

うーーん、まだ確信が持てないな……邪神のことは頭の片隅に置いておくだけにしよう。

それにもしても……疲れた。

そう思いながら、私は半年振りの眠りに落ちた。

## 2話・招かれたる客、到来（改）（後書き）

思いつきで邪神戦

混ぜ込みすぎて、原作が何だったのか、自分でも分からなくなつてしまいそうです（汗）

あと、戦闘描写が上手く書けない o\_rz

こんなダメダメな作者ですが、見捨てないでもらえるとありがたいです

ついでに感想もいただけると励みになります

では、また次回

2011・07・14 改訂

設定変更に伴い一部展開を変更しました。

第三話・日常に溶けじつてゐる、歌うたすか人達（改）（前書き）

まだまだ原作の時代に届かない  
早く他のキャラを出したいのです

それでは、第二話の始まり始まり

3話・日常に混じつてくる、要らんモノ達（改）

3話・日常に混じつてくる、要らんモノ達

ハスターちゃんを撃退してから大分経った。

あれから、偶に来る邪神を撃退するのが自分の仕事、みたいになつてきた。

どうやら、地球には歯ごたえのある相手が居る！ と、連中に目を付けられてしまつたようだ、とかなんとか駄神がほざいてた。

原作開始時までに邪神連中じのバカどもをどうにかしておかないと、ラブコメ系世界だった場合、主人公達のデートの最中に邪神襲来！ なんてあつた日には世界觀が粉々だ。いや、それも原作ブレイクに……なる、のか？

そんなこんなで、

修行、研究、冒險、時々邪神な日々を過くして、今は大体原作まで10億年、といったところか……

体術の修練は、結界外でも自由に行動できるようになつたため、正拳突きや筋トレだけでなく、式神しのと模擬戦を行うなど、実践方面に移行している。

無茶が効く身体ゆえ、基本的に何でも有りのルールで、

隙さえあれば目潰しやら金的狙いの一撃が飛び交う過激なものだ。

最初の頃は、なんというか、大人しい、『試合』染みたお上品な稽古だったのだが、

対邪神戦を経験して吹っ切れた。

今では、実戦じや敵は待ってくれない！ 追い討ち上等！ な『死合い』って感じに……

また、格闘漫画やゲームの記憶を掘り返して、使えそうな技を試してみたり、

動き方を観察しあつて無駄を省いたりと改善を続けてくる。

いや～、一撃で脳か心臓を消し飛ばされない限り、時間をかければほぼ元通りに再生できるし、

人の限界まで活用できる身体ゆえに学習効率も半端無い。チート万歳。

その上、修行に費やせる時間がたっぷりとあったおかげで、今ではミリ精度で狙った場所に、どんな体勢からでも打撃技を叩きこめるようになった。

まあ、ここまで真面目に取り組んできている理由は、修行や研究でもしていないことが無過ぎて、ホントに暇で暇で、精神的にマジで死にかねなかつたから、なのだが……

あと、鉄の棒や、鈍らではあるが剣の類等を生成して、棒術や剣術、弓術等も自己流ながら鍛錬している。

気の制御についてはほぼ問題無い。身体強化での課題は被弾時の制御の乱れを修正するくらいか？

気弾といった体外での運用にも慣れてきて、放出時のロスをもつと減らすのが今後の課題だ。

また、気は傷の回復や老化の抑制にも応用できることが判明。

身体完全制御と併用すれば、高速治癒等の反動を大幅に減らすことが可能になった。

反動で痛みが増幅されることにもすっかり慣れてしまっていたが、減らせるならそれによぎたことはない。

ただ、気は生命力由来のエネルギー<sup>いのち</sup>なので、

魔力と異なり、使いすぎると生命の危険があるというのが難点か……

魔法の方は、並列思考を利用しての理論構築、検証実験を重ね、魔眼の解析能力を用いてバグ取りや無駄な書式の削除、効率化を進めている。

術式構造が単純で、複雑な呪文を必要としない、実用的なものを作ることができた。

模擬戦で運用試験もしているので、使い勝手が悪いものは篩い落とされる。

実際、命の掛かった実戦では、相手が格下でもない限り、悠長に長つたらしい呪文など唱えては居られない。

そんなこんなで、この数億年で更に向上した魔力制御技術もあって、以前とは段違いの強度の魔力障壁や、魔力を収束発射する射撃魔術を発動できるようになった。

派生で、家事や工作等に便利な、低威力の簡易版も幾つか完成。

ただまあ、召喚などの儀式系魔術までは手が回らず、

洗練されてない術式で、面倒臭い工程を踏まないと発動できないのだが……

まだまだ種類は少ないが、徐々に数が増えてきた精霊に力を借りる精霊魔術も研究している。

この世界の精靈は、自然界の現象に一定濃度の魔素が蓄積し、単純ながらも自律行動をとるようになつたもの。

この精靈達、周囲から自分で取り込む魔素よりも、生物の体内で生成される魔力のほうが好きらしく、魔力あげるから手伝つてと、呪文詠唱で呼びかけるとすぐに集まつてくる。

そんな感じで精靈の力を借りると、通常の魔術に比べて楽に発動できることが分かつた。

非精靈魔術では、発動工程を術者自身が全て制御しなければならないが、

精靈魔術は手伝ってくれる精靈達によつて発動される分、術者に掛かる負担が小さいのだ。

ただ、意思疎通を完全にはできないため、細かい制御が殆どできないという欠点が……

ついでに、邪神の攻撃方法の解析＆模倣も試みている。

とはいへ、こつちの作った術式と規格が違いすぎて、一部を劣化再現するのが精一杯な上、

物騒なものばかりで使いどころが限られる感じなので、熱意は薄い。それでもSAN値直葬だけは洒落にならないので、精神防壁の改良は重ねている。

未だしふ3の魔眼では解析が不完全にしか出来ず、

実際に精神攻撃を喰らつてみるまで、どれだけ改良出来たかは分からぬのだが……

数億年掛けたとは言え、独力でここまでやつたのは自慢しても良いと思う。

ま、そういうことで、邪神撃退も強力な遠距離攻撃の習得で、多少

は楽になつた。

回避や防御をミスると、身体のどこかを持つていかれかねないのは相変わらずだけど。

イン、ヨウの方も大分能力のバリエーションが増えた。

感知結界に大型の魔力反応が引っ掛けた。  
久しぶりの邪神襲来のようだ。

「イン、ヨウ…………」「と矢を

「はい」

「了解です」

‘放出’、‘增幅’の性質を持つヨウの弓に、  
インの生成した‘侵蝕’、‘減衰’の性質を持つ矢をつがえる。  
更に呪文を唱え、風の速さ、氷結の性質を重ねる。

「疾！」

空から降つてくる、恐らく邪神さんと思われる影目掛けて一射、二射、三射……

放たれると同時に弓の‘增幅’によつて矢が十数本に分裂、そのまま邪神の身体へ切れ目なく着弾していく。

大気摩擦で真っ赤になつてゐる身体を、急速に氷結、冷却されて、脆くなつた部分が崩れ、落下と共にバラバラと剥離していく。

そして、着地の爆音と衝撃波が広がる。

が、ムクリと身体を起こす邪神の動きに、ダメージの影響は見られない。

バラバラ剥がれる破片の下からは、新たな表皮、触手などの器官が生えてくる。

邪神からしてみれば、身体の表面が剥がれる程度の攻撃でしかなかつたらしい。

再生能力の、減衰、も狙つてみたが、相手がでかすぎて効果が薄かつたようだ。

‘侵蝕’で、ある程度内部までダメージは通っているはずなんだが、やつぱり力量不足？

まだまだ改善の余地有、つてことかね……  
さて、どう対処しましょう？

露になつた姿は長い鼻の生えた、鱗で体を覆われた蛸のよつた力タチ。

と、邪神の姿を眼にした瞬間、身体がズシリと重くなる。  
髪の先などはピシピシと色を失い、固まつていく。

「くつ！？ 石化か？ 危介な能力を！！」

治療系の術式を全力で起動。対精神干渉抵抗術式も全開にする。  
視覚から侵入してくる、呪詛にまで到達した形質に全力で抵抗する。  
これは、SAN値を削られまくつた第一回対邪神戦を教訓として、  
長い長い研究の果てに開発、改良してきたもの。

たぶん、吸血鬼の魅了とか洗脳、転生者の二コボ、ナデポなどもほぼ無効化できるだろう。

それくらい力を入れて造つた代物……

だつたのだが、石化を中心するのが精一杯で、SAN値直葬にまで

手が回らない。

汚いさすが邪神きたない

氣を強く保つために唇を噛んで、氣勢を放ち精神を奮い立たせる。

# そのまま風を纏つて突撃！

重力制御の併用による。通常では在り得なし軌道を描きながら黒く巨大な、鉤爪のついた籠手を振りかぶる。

重たい打撃を伴う鉤爪の払い込みは、肉が強ける

— ! ! ! — „ & a m p ; „ % # \_ ? • ¥ | = , ! ” # % & a m p ; + > ¥ @

邪神特有の精神にくる奇声、攻撃に対する怒りの声か？  
勢い良く触腕が振り下ろされる。

かわした横で、打撃につぶれた触手の先端が液体のように弾け、  
不定形になつたソレが絡み付こうと襲い掛かつてくる。

「スライムプレイも『メンだ――つ――』」

「主様！ 左からも！！」

「避けて避けて――――――！――！」

式神、sも精神的にくるものがあったのか、あれ以来、触手やソレに類するものに対して、苦手意識を持つてし

まつたらしい。

回避の補助がいつもより精密な気がする。

攻撃を喰らつても平気な頑丈な身体かと思えば、いきなり不定形になつたり……

邪神つて奴らは、まつたくもつて常識外の連中ばかりだ！  
前もつて対策を考えっていても、ちつとも安心できない。

まあ、愚痴つてばかりも居られない。

「という訳で、氣分転換にお遊び……ゲフンゲフン、実験装備展開」

「アレを使うんですね、主様」

「楽しみです」

一旦距離を大きくとつて、仕切りなおし。

空間を歪めて造つた定番装備、影の倉庫からまず引っ張り出すのは、  
どこかで見たような形の銃。

銃身内部には二重螺旋のライフリング。それに沿つて刻まれるのは  
加速と収束の呪紋。

空間の許す限り、みつちりと繰り返し刻まれている。  
撃ち出されるのはカートリッジに封入された、

魔術によって高エネルギーを与えられた、原子や電子、陽子といった荷電粒子。

荷電粒子が自身の持つ高エネルギーによつて暴れ、ばらく、  
弾けようとするのを収束呪紋で押さえつけ、弾道、射程を安定させ、  
加速呪紋で弾速と威力を上げる。

それは、荷電粒子砲、すなわち『ビームライフル』

## キウン

トリガーを引くと、ほぼ光速で放たれる荷電粒子が邪神さんに着弾。鱗を弾けさせ、肉を焼き、貫通して空に溶けるようにして拡散し、消えた。

銃本体を造るのにすっつ……じく手間が掛かって、カートリッジ一個作るのに必要な魔力とか、一個のカートリッジでたつた5、6発しか撃てないこととかを考えると残念な威力ではあるがそれでも、ミノ粉なんて無い世界で、お遊びで造った代物としては良い出来。

「見える……」

伸ばされた触腕による攻撃をかわしながら、ガダム!!」を楽しむ。

うつむ、機動兵器同士の戦闘でないのが少々残念。存分に楽しみ、作り置きのカートリッジを使い切ると、次の実験装備を取り出す。

「えーっと、次は……」

現れたのは、大きな十字架を象ったモノ。百キロを超える重量の金属塊……

それを身体強化と重心移動で影から引き抜き、抱えるようにして構える。

中央に象嵌された、髑髏を模したグリップを握り、操作すると、ジャコツ！ と、十字架の長い一邊が分かたれ、中から黒光りする

銃身が姿を現す。  
引き金を引くと、

ガガガガガガガガガガガガ！

切れ目無い銃声と共に、装甲貫通、炸裂の術式を仕込んで作つた爆  
裂徹甲弾が撃ち出される。  
もちろん機関銃の方も、銃身に呪紋を刻んで、弾速、射程共に魔改  
造してある。

その連射力で弾幕を張り、襲い来る触手を撃ち落していく。  
弾が切れたたら振り回すように反転させて、機関銃の反対側のカバー  
を開く。

現れるのは砲口、そこから放たれるのは尻から火を噴きながら飛ん  
でいくロケット弾！

「ああ～、なんかトリガー・ハッピーの氣分が分かるかも……なんか  
楽しくなってきた  
よし、あと一挺作つて、トリップ・オブ・デスを……」

「主様！ しつかりして！ なんだか危ない人になつてるよーー？」

そうやつて、某マンガの神父の武器で弾をばら撒いたら、  
次の玩具を……

そんなこんなで、最後に引っ張り出したのは、  
杖とも銃ともつかない、棒状の何か。

音叉の様に別れた先端、杖と呼ぶに相応しい赤い宝玉、機械的なト  
リガーのついたグリップ。

ジャキリと構えて、魔術式を展開。

「全力、全壞……」

先端に光る円環状の呪紋帯が、砲身のように幾つも顯れる。それはまさに、魔砲陣……

音叉の間にキーワードには周辺の魔素を集め、魔力に変換した眩い光球。それが呪文と共に魔砲陣で収束し、加速、砲撃として放たれる。

スター　イトオ　ブレイカーアーバンツーム

一瞬視界が真っ白に染まる。

純粹な魔力砲撃、付加要素も何も無い魔力そのものの攻撃。今までに与えてきたダメージも相まって、

ある意味魔法生命体と言えるであろう邪神さんの、魔術的構造に もろに負荷を掛けることになつたようだ、

蝶みたいな形がテヘリと崩れた……なんだか見てる」にかか吐き

相手にも相当なダメージを与えることができたみたいだが、お遊び装備を試すつもりで、ちょっと気を抜いていたのが拙かつた。もろに精神的ダメージを喰らってしまった。

頭がくらくらする、視界が若干歪んでいる様な気が

しばりへひくお待ちください

少女？ リバー入中……

しばりへお待ちください

頭をガンガンと地面に叩きつけて、よつやつと正気に戻った。  
相手のほうも、身体の修復を優先していたらしく、  
見苦しい状態になっていた所を襲われずに済んだ。

「おえ……えっふ……イン、あちらやんの様子は？ うつ……」

「再生に専念していたようですね。」

削られた胴体よりも攻撃用の触腕等をメインに自己修復が行われた模様。

そのため、戦闘能力は6割強まで回復したようです。じきに行動再開しそうですね。」

「……今使える中で最大威力、最大効果を出せる攻撃は何だと思つ？」

「不定形の姿をとれるということは、純粹な打撃、斬撃よりも、氷結系で固める、若しくは炎熱系で蒸発させるのが妥当かと。どちらも重力・斥力系より制御は安定しています。」

雷撃系は麻痺と熱傷を防ぐのでしょうが、時間稼ぎにしかならないでしょう。

やはり純粹な炎熱系より熱量ダメージは低いと思いますし」

「やつぱりそうなつちやうか……でも、最初の一撃じゃ殆ど効かなかった、

つてことで、全力を振り絞らないと勝てないわね」

「はい」

「……ヨウ、しばらくお願ひ、凌いで…………ふう――――――氷  
精よ、集え」

「りょーかいです！」

大きく深呼吸して、眼を瞑る。

インの、熱量吸收、能力を全開にし、それを籠手に収束させる。  
呪文を唱え、冰雪・冷氣の精靈も集めていく。  
まだ制御が甘いのか、パキパキと周囲に霜が降りていき、吐く息が  
白く染まる。

目標以外に影響を与えないように、力を絞り込んでいき、  
魔力回路を形成、籠手に刻んだ呪紋と併せて、更に冷氣を集める。  
某ゲームのライバルキャラの技を真似たモノ。

それは、全てを止める術式。

絶対零度、それを叩き込む黒き籠手。

制御をミスつて暴走などしない様に、丁寧に術式の構成を編んでいく。

邪神の行動再開を知らせる地響きを、一時的に意識から外す。  
構成が完了するまでの防御はヨウに任せた。  
だから大丈夫、私は奴をぶっ飛ばせる攻撃をきつちりと準備する。

振り下ろされる触腕、それをヨウの構成する鎧が解けて巨大な楯を  
形成。

楯に重ねた、斥力、と、攻撃に対する角度でミシミシと軋みながら逸らす。

主に任された命を果たすために全力を尽くすヨウ。

防御している間に、形成した楯の裏側に刻んだ呪紋で火精や雷精を誘導、

相手の攻撃の合間を縫つて精靈弾を放つて牽制する。  
徐々に距離が詰まって、攻撃の密度が上がっていく。  
自身の形成する楯、装甲、鎧を軋ませ、鱗割れさせながら、  
‘斥力’、‘炎’、‘雷’等の付与した能力で凌いで、凌いで……  
そして

「ありがと、ヨウ……後は任せて。  
行くよ？ イン」

「はい」

籠めれるだけ籠めた、練れるだけ練った。

分子、原子の運動すらも止めてしまいかねない凍結の術式。  
それが宿つた黒い籠手を振りかぶり、  
もう、すぐそこにまで来ていた邪神の胴体に……

手刀を叩き込んだ。

ピキッ

その瞬間、音が消えた。

そこにあるのは、氷像。

真っ白に染まって、凍りついた巨像。

その巨体に、手刀を打ち込んだ地点から、  
キシキシシシシッ、と徐々に鱗が広がっていく。

表面から少しずつ凍った破片が剥がれ、砕けていく  
そして……

カシャ———ン

澄んだ音を響かせて、白い雪のように砕け散った。

そして、煌めく結晶が舞い散る中、左手からインで取り込んでいた  
熱量を放出する。

天へ向かつて立ち上る炎が、氷片に乱反射して、幻想的な光景を生  
み出す。

が、それも一時のこと。  
放出する熱量を高めていくと、

そのあまりの高熱に、氷片、肉片が蒸発、プラズマ化して一瞬の燐  
光を残して消滅していく。

放出を終えた時、そこには打撃・斬撃痕や硝子状に溶け固まつた高  
熱の跡が残る、

元もとの地形とはかけ離れた荒野が広がっていた。

「はああああああああー————。やつと終わつたあ  
お疲れ様、イン。口ウも良く凌ぎをつてくれたわ、ホントにありがとうございました」と

「そんな……大げさですよ、マスター」

大きく息を吐いて、気を緩める

精神防護の術式も平常レベルに下げ、インと口ウも鎧から人型へ  
ヨウの方は無茶させたためか、髪は乱れ、身に纏う衣装もボロボロ  
になつている。

一人を抱き寄せて、頭を優しく撫でてあげると、  
とろーんと気持ち良さげに表情を緩める。

(やつほー、お疲れー。ガタノトーア相手に頑張ったね?)

「またアンタですか……」

そこに掛けられる陽気な声、解放感に水を差されて顔を顰める。  
なんか、妙に機嫌が良さげだ。

口ウの質問にもノリノリで答えている。

「ねえ、ガタノトーアって何?」

(クトウルーの長男、自分を見た人間を石化しちゃうの)

「へーー」

「アンタ、どうかしたの？ 阳気すぎて氣味が悪い……」

(だつて、久しぶりの邪神戦じゃない。結構見物だつたわ  
氣分が良いから、大抵の質問には答えるわよ)

「……じゃ、今回の邪神、これまでの邪神と違つて本体？ が逃げ  
る前に、

きれいさつぱり粉々にしちやつたけど、大丈夫？」

(え？ そこに本体が居るじゃない……)

暇神の言葉に辺りを見回すと、クレーターの影に小さな蛸が見えた。  
熱量放出の際に茹つてしまつたのか、灰色がかっていた体色が赤く  
なつてゐる……

「これ？」

(そう。殆ど力を失つて、戦闘能力や石化、移動、大気圏離脱もで  
きなくなつてゐるみたいだけど。

一応、まだ生きてはいるよ)

「ふーーん……ねえ、こいつと会話してみたいから通訳してくれな  
い？」

(会話？ 別にいいわよ。ただ、向こうにあつてこひらに無い概  
念や、その逆もあるから、

意思疎通できたつもり、になる可能性があるけど)

「……それでも良いから、お願ひ

(はいはい)

おそらく地球初の星間会談。

その結果分かったことは、邪神さんたちは娯楽に餓えている、ということ。

自身の能力だけで大抵のことができてしまうためか、物を造る、ということが発展しなかつたらしい。

暇潰しに他の星の奴と戦つたり、寝たり、食つたり……そんなことしかしてなかつた、と。

その一環で、手ごわい奴が居る、とみんなして地球に来るようになつたそうな……はた迷惑な。

最終的に、この星では色々なモノが生み出されるはずだから、文明が発達したら、出来るだけちょっかい出さずに、例えるとしても、人の姿を模して騒ぎにならないようにしてくれ、とお願いしたら、意外と喜んで帰つていつた……それでいいのか、邪神って。

ちなみに、暇神は（折角の原作ブレイクフラグが……）と不満たらたらだつた。

それでも、通訳をちゃんとしてくれているあたり、中々に義理堅い。

会談は考え方の違い、概念の有無などで相当長引いた。

言葉の意味を一から説明しなければならない場合もあつたから、ホントに疲れた……下手をすると戦闘よりも。

文化が多少違つていても、言葉が通じるつて、ホントに素晴らしいと再確認した気分だ。

地球人だれか、できれば現代日本人と無性に話したい……

ただ、この会談で、もう一般人の一生分、頭使つて喋つた気がする。  
しばりくは、何も考えたくない……

「ま、まあ、これで将来、文明に無駄な被害を出さずに済みそうね。  
じきに多細胞生物も発生するだろうし、ゆっくり出来ると良いな……」

「……」

「そうですね……食料の方も、もう少しでマスターの記憶にあるものに辿り着けそうですし、  
しばりくは研究に専念したいです」

「美味しいもの……じゅるり　おつと涎が。  
……でも今は、久しぶりにゆっくり寝たこう」

「やうね、まずはゆっくり休んで、他の事はそれからね」

億年単位で考えたり、年単位で戦つたり、交渉したり……  
自分も本当に気が長くなつたな、そんなとりとめもないことを思い  
ながら、

インヒュウを抱き寄せ、床に就いた。

### 3話・日常に混じつてくる、要らんモノ達（改）（後書き）

なかなか書く内容が思い浮かばず、結局再び邪神に来てもらいました  
恐竜すらまだ出てこない時代・・・ネタに困つて  
開始時期を昔にしすぎたか、と若干後悔しています（苦笑）  
今後も更新が遅くなることがあると思いますが、見捨てないでもら  
えるとありがたいです

では、また次回

2011.07.23 改訂

一部の設定変更に伴い、加筆修正しました。  
無駄に増量してしまった設定関連の記述は、読み流してもらつても  
結構です。

改訂前よりも主人公を強化してしまったような……

## 4話・食生活の充実と、邪神戦の置き土産（改）（前書き）

やつとい、まともな生物の登場。

主人公達の食生活の行方やいかに！？

さあ、第4話の始まりです。

4話・食生活の充実と、邪神戦の置き土産（改）

## 4話・食生活の充実と、邪神戦の置き土産

しかし原作はでおよそ9億年? となつた。

ここ最近は静かなもので、数千年近くもの間、邪神も来ず、暇神もちょっとかいをかけてこないので、

のんびり修行や研究に勤むことができる

まだまだ小さいものばかりだが  
を材料に、

美味しそうな肉作成に成功した……長かった此處まで来るのは本当に永かつた……

たことか。

おたにて シー

それによつて歯み縛めたとの食感も……

久し、ソノ、

ホンツ……トに久しぶりのこの食感……堪らない」と

「ムグムグ……ただ塩振つて焼いただけのお肉が、こんなに美味しいなんて驚きです」

「ガツガツムシャムシャ……主様、今まで味見を頑張つてきて、  
実験台

ホントに良かつたです。

焼肉を口に入れ、眼を瞑つて味覚に集中する。

食欲をそそる匂い、硬過ぎず、それでいて嗜み応えのあるお肉、  
噛む度に溢れる肉汁、旨味……

主に試作食材の味見を担当していたヨウは感動のあまり、ホロリと  
涙を零している。

一通り食べて満足したら、今後の相談。

「……次は野菜、かな？」

「そうですね。」

「あと、お酒も飲んでみたい！」

「お酒は糖を発酵、つてこの時代には酵母菌がいないんだったね：  
…どうしようか」

「効果を代用できる術式を組んで、魔力で代行するしかないかと」

「やっぱううなるのね……」

「主様、ファイトですー。」

砂糖は出来ているから簡単かと思つたが、全然そんなことは無かつ  
た。

結局、生のアルコールを生成して、お酒らしくするために、  
それらに香りや味といった風味を付けていく。

他の研究も並行して続けていたせいでもあるけど、  
満足のいく物ができるまで、数十万年もかかりてしまった。

特に香りの素となる分子は、種類が多く過ぎる上に構造が複雑過ぎる。

それに、構造がほんの一  
部が変わるだけであつたく別の香りに、  
混ぜ合わせれば、更に別の香りに……とキリが無い。  
似たようなものをチマチマ作つていぐのは、正直言つて面倒臭かつ  
た。

……副産物として、香辛料がたっぷり出来たのは嬉しい誤算だつた  
けど。

花の香りっぽいものも造れたので、

一応、この身体も女の子な訳だし、と香水も造つてみた。

今のところ必要性は皆無なのだけど……他人どころかまともな動物  
すら存在しないし。

原作まで6億年くらい？

スノーボールアース  
大規模な氷河期も收まり、

まだまだ地上は静かだが、海中の生物の種類が大分増えてきた。  
三葉虫は大抵の海で獲れるようになり、

カンブリア紀特有のよく分からん生物もたくさん出現した。

有名どころでは棘々としたハルケギニアや、海老みたいなアノマロ  
カリスなどなど……

これで節足動物ばかりだが、本物の肉を食えるようになった。

三葉虫を試しに焼いて食つてみたが、淡白な味で中々悪くなかった。  
植物の方は藻類しか居ないので、海苔モドキにするぐらいしかない。  
……植物の地上進出が待ち遠しい。

原作までだいたい2億年、のはず……

やつと恐竜出現。ここまで本当に永かった。

植物の地上進出、昆虫の発生、大規模な氷期や生物の大量絶滅……

それらを乗り越えての生命の進化には圧倒される。

ついでに、この世界独自の進化も起こってしまった。

なんというか、邪神との戦いをちょいちょいやつっていたせいで、戦場跡に残っていた魔術の残滓や、残留呪力などの汚染？ によつて、

魔力を進化の糧にした生物が出現してしまつた。

鼻先の角から雷を放つ草食恐竜とか、炎を吐く肉食恐竜とか……ナンテコツタ

私のチートスキルのおかげですぐに壊くのは構わない、構わないんだが……

じやれ合いのつもりなのか、風を纏つて突進されたり、炎を鼻から吹き出しながら顔を擦り付けられるのは……ちょっと遠慮したい。

大抵の攻撃？ は受け流せるものとはいえ、

癒しとなるはずだった動物達との交流で、かえつて気が休まらないということに……

戦闘の後始末をしていなかつた自分のせいとはいえ、ちょっと泣きたい。グスン。

インは静かな方が落ち着くのか、あまり自分から森の方へ行こうとしないが、

ヨウは良い遊び相手が出来た、とばかりに毎日のよつに恐竜の住処へ突撃している。

時には仮頂面のインを引き摺つていいくこともあり、苦笑してしまう。

いろいろと研究を重ねて、天然建材を用いた建築技術なんてのも習得。

他にも楽器とか、食器、家具なんかも木を削ったり、金属を鋳溶かしたりして作成。

超がつく古代に暮らしているのに、中世より若干上等なレベルの生活をしている。

それに、天然食材もたっぷり採れるので、料理が美味しい堪らない。

まともな物を食べることが出来なかつた数十億年のことと思つと、多少の失敗料理など可愛いものだ……つん、なんかホントに涙が出てきた。

まあ、そんなわけで、食事時のテーブルは小さな戦場といった感じだ。

「あーー、するーー！ それ私が狙つてたのに！」

「フツ……早い者勝ちです」

「じゃあ、これ貰い！」

「つーー、くうつ……ならば、これは私が頂きます」

「はいはい、もうひとつと静かに食べなさい」

あんまり騒がしいと注意するけど……なんだか、母親になつたような気分。

確かに、私があの娘達を育てたようなものだけど、ちょっと複雑な気分。

そう思いながら、木の実から造った酒を呷つた。

原作まで1億年?

恐竜の全盛期。

一足歩行、四足歩行の恐竜に加え、翼竜や首長竜など様々な種が生まれ、それらの中で、更に魔力を取り込んだ種が……と、かなりカオスな世界になつた。

……なつてしまつた。

海水を操つて翼竜を撃ち落す首長竜がいるかと思えば、風を操つてティラノサウルスを群で狩る翼竜も居るのだ。いやもう、前世の世界の学者が見たら腰を抜かしかねない。

そんな中、自分たちが何をしているかといふと、魔力を得た竜の中でも上位の能力を持つ種を選んで、乗騎として仕込んでみようと挑戦中。

騎乗者の命令を伝える術式や、

乗騎を落ち着かせる術式を編みこんだ手綱や鞍を作成したり、乗騎として育てやすく、扱いやすい性質になるように、馬と同様に品種改良したり。

まあ、遺伝子をいじるとか、生物実験ちっくなことはしていないけど……

何が起こるかわからないし、バクテリアと違い、生命力も高い竜の相手は面倒くさそう。

それに、邪神相手に鍛えた戦闘能力は、手加減が難しく、まだまだ未熟なこの星の生命相手だと過剰すぎて、

周りへの被害が半端ないことになりそうだ……

そういうことで、良い感じの牡と牝をかけ合わせたり、  
育て方を工夫したり、いろいろやつてみた。

最終的に、物語に出てくる翼（リンドブルム）ある竜みたいな感じになつた。

幼いころは全身柔らかな羽毛に包まれていて、  
成長するに従つて、手足や鼻先、目元の辺り等が鱗へと生え変わつ  
ていく。

体を覆う羽毛も、幼竜の頃のものから生え変わって、  
衝撃吸収、耐刃性のある頑丈なものに……

幼竜のものと比べると、少しゴワゴワした感じではあるが、  
それでもまだ撫でて気持ちがいい毛質。

慣れた竜に鞍無しで跨ると、ふかふかとクッショーンの効いた背中は  
乗り心地抜群。

老いてくると、羽毛が抜け鱗に覆われている部位が増えてくるの  
だが……

老人の禿頭を連想してしまつな。

あと、個体によって吐くブレスの種類が違う。  
珍しい奴では毒のブレス、石化のブレスとか。

寿命が無いも同然の私達と違い、数十年で死んでしまう……  
懐いていた子が死んでしまうと、やはり悲しい。

けど、世代を重ねる」とに少しずつ寿命を延ばし、

知恵を付けてきて、言葉は喋れないながらも「ヨリコニケーション能  
力を発達させ、

百代目くらい? から、半ば奉仕種族みたいに……あれ?  
私ってどつかの邪神の類だつたっけ?

ちなみに、ヨウはノリノリで命令を下したり、変な儀式を教えたり  
している。

……後からちゃんと修正してるけど。

インも仕事を手伝わせたり、作業しているところを覗いて、  
ちやつかり自分の分も作らせたりと、何気に活用？ している。

「さあ、唱えるのー いあいあ……」

「やめんかつ……！」

スパーーーンッ！

今日も森にハリセンの音が響く。

原作まで約6500万年、かな？

恐竜の絶滅。

巨大隕石の落下は久しぶりだつたし、  
他に生命の居ない時期のものしか知らなかつたから、  
隕石落下が生物にどれほどの影響を与えるのか、実感させられた。  
隕石の落着地点の周辺は衝撃波と熱波に薙ぎ払われた。  
また、その他の地域も、巻き上げられた粉塵に覆われ、  
降り注ぐ日光の減少による急速な寒冷化によつて、  
殆どの生物が飢えと寒さに死んでいった。

このまま何もせず、滅びを見届けるべきなのだろうか、迷う。

この絶滅を回避させたとして、今後も絶滅の危機の度に何か対処するのか？

そうした場合、哺乳類の発達ヒトの歴史は？

今後、恐竜の危機を見過ごすなら、結局見捨てるのと結果は同じでは？

いろいろと考えた結果、もう自分のやりたいようにした。

無駄に力を持つてしまっている時点で、

本来の歴史を意図せずして変えてしまうことも、充分にあり得る。既に生命の進化の系統樹だって、本来のものとは大きくかけ離れてしまっている。

だから、何があつても受け入れる覚悟で、自分の望むままに行動する、そう決めた。

### 絶滅させるには惜しい種

恐竜の進化における、現時点での各頂点に位置する種族 を選び、

一部の個体を儀式魔術で、生息していた土地に凍結封印した他は、そのまま滅びを見届けた。

封印・保護した理由は、ここで絶滅しなかつた場合、進化の果てにどのような力タチを得るのかが気になつたから、というものの。

いつか、彼らを開放できるような、広大な隔離空間を創らないとね。

まあ、いくら自身に力があると言つても、個人でやれることには限りがあるわけだし……

大筋の世界の流れを積極的に変えるつもりはないが、親しい人が巻き込まれた時など、自分で動くと決めた場合はたぶん、躊躇することはないだろ? な……

ちなみに我が奉仕種族（笑）は魔術を駆使し、また数が少なかつたこともあり、餓えることもなく自力で生き延びました。

他にも、魔力を取り込んだ種や、羽毛を発達させた後の鳥類に繋が

る種、

哺乳類の祖先なども無事に生き延びた。

騒動がひと段落ついた後、

隕石の衝撃波で吹き飛んでしまった我が家をどうするか、

また、隕石の影響での寒冷化にどう対処するか、皆で話し合った結果、

地盤のしつかりした土地を選んで、地下に住居を作ることにした。ただ、暖かそうだから、と火山近くを掘りうとしたのは失敗だった

いや、魔術で壁を強化したり、冷却呪紋を彫ったりと工夫してみたが、

流石に溶岩は無理。

自分たちは無事でも、家財道具が全滅してしまつ。

そんな訳で、火山からある程度離れた土地の地下に新居を構えた。温泉を引いて、床暖房もどきも設置。

スクスクと引きこもり生活を堪能した……いや、ちゃんと鍛錬は続けていますよ？

だつて、他の転生者と敵対した場合、

ケチヨンケチヨンにされるなんてのは遠慮したいし。

ただ、自分は思っていたよりも研究者気質だつたらしく、  
食の研究、便利な魔道具の開発などなど……

術式の開発や体捌きの改良も含め、のめりこむとなかなか止まらず、頑丈な身体に任せて、数週間徹夜で研究漬けな日々を送つたことも

狩りや家事はヨウに任せて、インと一緒に実験を繰り返す日々。

「二人とも、あの頃は眼が怖かった。ホントに危ない人みたいだつ

た

とは、数世紀後のコウの言葉。

原作開始まで2500万年くらい?  
二足歩行する猿の登場。

まだ前かがみで、四足歩行に近いけど、  
もうすぐ人に会える…………ここに至るまで、本当に永かつた!!!

それでは、コリコリケーションに挑戦!

我が奉仕種族 とりあえず、竜種と命ぜ。

他の恐竜から進化した種族は殆ど滅んでしまった とも、  
魔術の応用による念話や鳴き声を用いて、今まで会話? 出来て  
いたけど、

なんていうか、敬われている感じがして、遠慮なく話せるのはイン  
とヨウだけ……

私のことを知らない相手なら、フランクに喋れるかも?

そう思つて試みたのだが、まず種族が違つことから、あつさり群か  
ら追い払われた。

敵対するわけにいかないから、反撃できないし……

一方的に勝ち闇を上げられると、自分のやつてこむことの虚しさを  
感じて……

ちょっと泣きたい。

群の上位に居る個体の中には、簡単な魔力運用する奴までいて、  
他の個体の投石に混じって、魔弾が飛んできたりする……

チートスキルの“魅力（弱）”はどうした!? と思つたら、間の  
悪いことに繁殖期だった。

群れの中でもピコピリしているところに、他の種が近づいたら、そりや攻撃されるわ。

といふことで、時期を改めて群と接触。鳴き声を分析してみた。会話の中身は単純だつた。食べ物、敵、近寄るな、出発、休憩など、基本的に単語のぶつ切り。

まだ知性が十分に発達していないから仕方がない、か。

あまり接触しすぎると、第二の奉仕種族に成りかねないし。

……現に今も、ヨウガノリノリで群のボスを下して、身振り手振りを交えつつ命令している。

インもちゃっかり自分に果物を運ばせている……

式神なのにフリーダム過ぎる。いや、そう育てたのは私だけど。とりあえず、

「イン！ ヨウ！ バカやつてないで、ひとつと帰るわよー。」

「……はい、主様」

「えへへ、面白くなつてきたのに……」

「友人作りに来ておいで、奉仕種族を増やしてどうするのよ……まったく」

原作20万年前？

ホモ・サピエンスと思しきヒトの出現を確認。

群も大きくなり、狩りのやり方、木の実の採集などの行動も、過去の原人、旧人に比べて、複雑になつてきた。

まだまだ、衣服もきちんとしたものではなく、道具も石と木で出来たものが殆ど。

でも、やつとヒトが、ヒトと話せる…………と、思ったが、ちょっとタイム。

今までの猿人、原人などには通用していたけど、

今のヒト相手に“魅力（弱）”はどのくらい効くのだろうか？  
効果が薄いのであれば、ちゃんと接触パターンを考えておかないと、  
下手なやり方では第一印象が最悪に、なんてことや、

警戒されて群れに入れないので可能性も……

いや、どうせ寿命の違いか、

しばらく過ごしたら離れなければいけない訳だし、思い切って突撃しても良いか？

ということで、思い切ってそのまま群に参入してみた。

結果を言えば、子供達にものすつじく懐かれた……

元引きこもりで、今も人間関係薄い奴にどうしろと……？

あ、ちょっと、髪引つ張らないで！ それ取っちゃダメ！！

親は若干警戒していたみたいだけど、

子供相手にあわあわしている様を見て笑っていたから、たぶん大丈夫

別の群？ 集落？ からはぐれた、という設定で式神とは姉妹つてことに。

ちなみに名前は、インとワウはそのまま、私はソウにした。

由来は……音の響きが良いから、黒と白の間の色として、

自分の色として蒼をイメージしたから。

あと、（発音的には）現実的に在りそうな感じがするから、かな。

まだ人間関係も単純で、言葉も未発達といえるんだろうけど、素朴な世界で癒された。

いすれ此処を離れなければいけないことを考えると、寂しい……  
居る間だけでも、と子供らに石蹴りなんかの簡単な遊びを教えたり、  
娘衆と一緒に蔓を編んで鞄を作ったり、  
長おさ（髭モジヤのおっさん）に気に入られて、  
息子の嫁にならんか？ と誘われたり……

成長しない外見を幻術・魔術でごまかして、十数年過ごした。  
これ以上長く居ると、離れられなくなりそうな気がして、  
魔術での記憶操作や催眠術を駆使して、  
自分達の存在を一時の夢だったかのように認識させてから、集落を  
離れた。

「皆……さよなら」

「……主様、私たちはずっと一緒にです」

「そうです、主様は一人なんかじゃありません」

「うん……ありがと」

この時代に見合はない、過剰な力を持つ私たち……

頼られ、祟められるだけの関係を避けたいなら、関わり方を慎重に  
考えなければならない。

まだまだ未発達な彼らの自主性、自立性を奪いかねない。  
実際に竜種を奉仕種族にしてしまったのだから、今後は注意してい  
かないと……

それに、対処を一步間違えれば、恐れられ、厭われることになつて、  
後々の処理が面倒になる。

広範囲型の認識操作は、効力の調整が難しいのだ。

低出力だと魔力耐性が高い人への効きが悪いし、

高耐性の人には合わせると、無関係な記憶まで吹っ飛ばされる人が大量に現れかねない。

ヒトの理性や社会性が発達するまで、長期に渡つて関わることは無いのだろう。

そう思うと、やはり寂しい。

普通の人間を友に持つことが出来るようになるのは、いつになるのだろうか……

原作前3万年くらい？

好き勝手にあっちこっち動きつつ、

たまに人の集落に混じる生活を続けて、はや十数万年。

北アメリカの方で、久しぶりの邪神戦でクレーターを造つたり、ヨーロッパの辺りでは、洞窟にみんなして絵を描いたり、と気ままに過ごした。

民族大移動？ みたいなのは、中々気の良い連中だつたから、現地の人を装つて薬草の知識とか、食べる野草について教えてあげたこともあつた。

数百年ぶりに同じ集落を訪れるとき、認識を薄めているとはいえ、覚えている人が何人かいたらしく、父祖から伝え聞かされた伝説のお方、

白と黒の童を連れた賢者様、と崇められた……オーマイガッ！  
信仰されるのはゴメンなので、集落を離れるときは、もちろん念入りに記憶を消しました。

はいそこの、「……勿体無い」とか言わない！

第一、信仰されすぎて、身動き取れなくなつたりビリする。

竜種の方は、既に寿命が数百～千年クラスになつてるので、信仰は薄れることなく、相変わらず崇められている。

……「……」（いつちはもう諦めた。術をかけるとしても魔力耐性、精神力、共に高レベルだし。

基本的に争いを好まない性格なので、必要最低限の狩りを除いて、人や他の動物を避けて、山奥の峡谷に隠れ住んでいる。

長寿なためか、生まれる仔が少なく、成長もゆっくりとしたもの。偶に隠れ里を訪れるとき大いに歓迎される。

なんか仔犬が尻尾を振つて駆け寄つてくる感じ……団体は大きいけど。

幼竜なんて、信仰してくる成竜と違い、無邪気に懐いてくれて、ホントにもう、可愛いっ！！

成長するにつれて、私＝カミサマ、という風に刷り込まれていくけど……。

だから、仔（卵）が生まれたら連絡してもらつ」としている。卵から孵つたばかりの仔竜の可愛さとったら……

語彙力のない自分が恨めしくなるくらい。

親の方も、名付け親になつてくれ、と言つてくれるもんだから、……無い頭を振り絞つて、嘗ての自分の知識から、良い意味の言葉、響きの良い言葉を引っ張ってきて、命名している。

おかげで、竜種の隠れ里は日本人めいた名前が飛び交つていい……  
教え込んだ言語も日本語だし。

見た目が西洋の竜に近い（ノッポ氣味の、東洋の竜みたいな胴長の個体も居る）

のに台無し、かもしだい？

そんな感じで、最近（ここ数億年くらい？）生まれた仔らは、もう自分の子、孫みたいな気分

流石に此処まで来ると、見捨てることも出来ないから、何かあつたらこうに知らせが入るよつに、通信術式を組んでいる。

（ソウ様……どうか、うちの仔にも名付けてやつてください）

「うん……じゃあ……マチコ、真を知る子、真知子。

困難にあっても挫けずに、自分の道を選べるように……お前の生に幸多からんことを」

えー、もっとカッコイイ名前にしようよ、とかほざく声が聞こえたが、

DQNネーム反対、名前は一生ついて回るもの、堅実なもので良いの！

マンガとか、二次創作とは違うんです。

……あれ？ よく考えたら、

今の自分は創作（に良く似た）世界の住人だった……ま、いつか。

原作まで大体1万年、だと思つ。

久しぶりの氷期も終わり、

世界地図も自分の知っていたものとあまり変わらない姿になつた。犬を飼う集落も増え、また、狩猟から農耕に切り替えるところも出てきた。

人の住まう領域も大分増え、自然界の存在を神として崇めたり、託宣を受けようしたり、色々と地域ごとに特色も出てきている。

魔力を運用できる人が巫女として選ばれ、

精靈と交感して簡単な天候予測や占いをしたり、  
神事を取り仕切つたり、

……もちろん私が集落に潜り込む時は、そんなことに巻き込まれないようには、

魔力が無いと誤認されるよう、神職さんの感覚を騙している。

が、何故か白黒の童を連れた賢者の伝承があちこちに残っている。いや、確かに気に入つた連中には、歴史を変えない、発展させすぎない程度に色々教えたりしたけど、

インとヨウの髪の色を幻術で変えたり、離れる時に念入りに記憶や認識を弄つたりして、

ちゃんと? 誤魔化しているのに……

ちなみに、この世界の住人の髪、瞳の色は赤や青、緑等も存在するので結構カラフル。

透き通るような紅の髪の娘とか、

深い翡翠の色をした髪の子とかも稀に現れるけど、とっても綺麗。

駄神が何か余計なことをしているんじゃないだろうな……今度問い合わせてみるか?

それとも、感覚・認識に特化した能力を秘めた人でも居たのだろうか?

まあ、民間伝承程度なら、後に宗教が発展すれば薄れるだろう、といふか薄れてくれ……お願い……

それから、世界各地で妙な感じの空間、といふか、場の様なものの  
フイールドを確認した。

何なのだろうか、これは……

どつかの異世界と繋がっているとか、そんなことは無い、よな？

……あれ、もしかしてこれってフラグ？

原作まで5千年くらい？ 紀元前3千年前後。

side 暇神

エジプト、メソポタミア等で文明の大きな発達を確認  
やつと人類の記録に残る“歴史”の始まり。本格的な“物語”  
の始まり。

長かった……本当に、ほんとうに……永かった。

さあ、楽しませてくれよ？ ソウ、そして他の転生者の諸君。  
フフフフフ、フハハハハハハハツ、アーッハツハツハツハ  
ツハツハ……

#### 4話・食生活の充実と、邪神戦の置き土産（改）（後書き）

やつと、ようやつと人の文明に至りました

主人公の名前が出るまで、そして人と、文明？と接触するまで  
プロローグ含めて4話も掛けてしまった……ここまで、作者として  
も長かったです

主人公の冒険はこれから本格的に始まるのです  
他の転生者諸君の出番もうすぐ……

今後の展開にご期待……いえ、あまり期待しないで待っていてください  
なにぶん、文才の無い作者ですので

では、また次回

2010・10・08 内容を若干修正しました

2011・07・31 改訂

一部設定の変更に伴い、加筆修正しました。

改定前では上手く纏められていなかつた内容も、改めて追加しました。

以降の展開で徐々に違いが出てくる……はず、です……

## 5話・魔改造、やひるやむなり、徹底改（改）（前書き）

原作まではまだまだ遠いですが、

よつやく新キヤリ登場！

それでは5話の開幕です。

## 5話・魔改造、どうせやるなら、徹底的に（改）

5話・魔改造、どうせやるなら、徹底的に

原作まで5千年くらい？ 紀元前3千年前後。  
エジプトやら、メソポタミアやら覗いてみた。  
村から街へと発展しつつあり、交易の拠点となつていてるだけあって  
可愛い娘も多く、

裏町を覗いてイケナイコトをしたことも……

億年単位でインやヨウと鍛えたテクをなめないで？  
ふふふふ、ここか？ ここがええのんかあ～～？

ハツ、ちょっと危ない方向へ意識が飛んでいた気がする。

人が多い分、街に潜り込んでもそれほど怪しまれず、結構長居して  
しまった。

まあ、余所はまだ発展していないだろ？から、移つても見るものは  
少なそうだけど。

それに、こういった文明が発達し始める土地は、

人が住みやすい土地だというだけでなく、

異世界からの来訪者達の影響の強い場でもあつたらしい。

大きな街のある土地は、以前に妙な感じの場を感知した所で、  
やはりといつか、何といつか……異界との繋がりが強い場だつたら  
しく、

カニガニが干渉するための『門』の機能を持つ神殿等が建てられている。

連中が一いつひにちよつかい出した所で、來た経緯は、

なんか変な空間見つけ  
どつやら余所の世界と繋がっているみたい

面白やうだから遊びに行こう

異世界交流開始

といつ流れらしい。

ただ、彼らはあくまで、

異世界も含めての『この世界』『この次元』に存在する一種族としての『神』であり、

『この世界』よりも高位に位置する、『創造神』とでもいづべき暇ひま神とは異なる。

只人よりも遙かに高い能力を持つてているのは確かだが、

奇跡みたいな神様染みた能力を使える者はほとんど居ない。

居たとしても、厳しい制限に縛られ、滅多に使えるものではないらしい。

そんなこんなで、街の神殿に遊びに行くと、いろんなカニミと交流できる。

この感じだと、悪魔の類も居るんだろう。どんな連中なのかな？

メソポタミアで知り合つたティアマト、apseー夫妻とその子供達

+  
……

バビロニア神話でも伝えられる、人よりもずっと高い能力を持つ彼らとの交流では、

能力の加減をする必要が無く、気楽に付き合つことができ、ホ

ントに楽しかった。

邪神達と違つて、『リリコニケーション』も楽だつたし……

エジプトの神のムンムに、小物作りのコツを教えてもらひたり、

天の神アヌから星・空について学んだり、

水に関わるカミが多いことから、いろいろと便利な水の使い方を教わつたり、

女に見境のないエアに口説かれ、あまりのしつこさに吐きのめしてしまつたり……

「ソーウちゃん、俺と一緒にいじっこ（『ガッ！）

「……いい加減、しつこいつ…… 女口説く他にやむむいの！」？」「

「俺が何故口説くのかって？……それは、そこに美女が居るからさ

！……」（キリッ）

堂々とあんなこと言わると、しかも無駄に爽やかな笑顔で…… イラッとするわね。

ただ、ここまでされると、いつも清々しいというか……もう、なんか吹っ切れた気分

「…………よし、これだけしても分かってもらえないんだから、もつと激しいのカマしても全然問題ないよね イン、ヨウ、おいで」

「「はーい」」

「…………ちょっと待つて。そんな物騒な物を、ビーして俺に笑顔で向

けているの?」「

「聞き分けのない、ウザい奴に向かって、  
思いつきりぶちかましたら、スッキリするかな?」と思つてね」

「いや、待つて、それはマジで洒落にな「アツ-----」」

それにもしても、カミツテやつは性に奔放すぎる。

兄弟姉妹であつても子供作っちゃうし、娘でも息子でもくつ付いち  
やうし……

エアなんて孫娘、曾孫でもOKとか……マジで死ねばいいのに(ボ  
ソリ)

私の式神<sup>式神</sup>にまで手を出そりとしゃがつて……  
しかも権力? 上昇志向が強くて、親に喧嘩売つてばかりだし。

いやまあ、私も可愛かつたり綺麗な女神幾柱かと関係持つたことは  
あるけど、

あくまで普通に? 恋愛? しての結果であつて、

無理やり迫るなんてことはしたことないし……

え、五十歩百歩? またまたご[冗談を]、あはははははは……

そういうえば、親子喧嘩に巻き込まれかけたときは、久しぶりに死ぬ  
かと思った。

どうやら、カミのいちちらでの身体は、いわば仮想体<sup>アバター</sup>であり、  
例え死んだとしても、向こう側の本体がどうにかなるわけではない  
そうだ。

ただし、仮想体<sup>アバター</sup>を失ったカミはいちちらに干渉出来なくなってしまう。

それに加え、人の信仰、思いの大きさによって、こちらで振るえる力も変動してしまう。

これは、人の強い想念を利用して、仮想体へ送れる力の総量を増加させているため

だ。

信仰を奪い合うのは、力を増強させ、こちらに関わりやすくなるため。

潰し合うのは、競争相手を減らして自分の影響力を増すため。つまり、この世界における、主なカミガミの争いというのは、こちらへの干渉権を賭けてのもの、らしい。

ということで、じやれ合いの類を除いて、

本体に影響のないこちらでの戦いは、かなりガチでの殺し合いに……一応は、一般民衆を巻き込まないだけの分別はあるようだが、ある程度の能力がある私の場合は、近くに居ようと関係がないらしい。

一度文句を言いに行つたら、

自分でちゃんと対処できるのに何で文句を言われるのかと、不思議がられた。

……価値観の違いつて、難しい。

そんな感じで、古代文明の中心都市を拠点に、異界のカミガミと交流しつつ、あちこちふらつく気ままな日々。長江や黄河といった大河をクロールでわたってみたり、見所ある竜種の少女（160歳くらい）を連れて、  
とか乗つかって修行を付けつつ地球一周してみたこともあった。

あと、ピラミッド建造時に建材に勝手に秘密の呪紋を刻んだこともあつたし、

警備役らしきミイラと鬼ごっこもやった。

ちなみに、刻んだ呪紋の効果は土地の地力の底上げ。これで無茶な耕作・伐採等をしない限り、正史と比べて多少砂漠化が抑えられるはず。

そうそう、この世界のピラミッドには、

やはりと言つべきか、建造当初から呪術的な要素を孕んでいた。

洪水期の公共事業みたいな感じで作られたこの施設に備えられたのは、

周囲の土地を肥沃にするように、周辺の魔素を集め、土地に還元させる機能。

私が刻んだ呪紋と合わせて、食つものに困る」とは無もつだな、この辺りは。

他には、カミガミへの祈りを集束させ、神殿を強化する機能なども

……

あまりに物騒なものは無効化したけど。

儀式のために周囲から生命力をかき集める仕組みとか、

信仰を強制する、いわば洗脳術式ともいうべきものとか。

そのほかにしたことといえば、

対邪神戦等では鍛え辛い、対人戦闘の修練。

同族を傷つけ、殺すことに対する精神の切り替え方、

今の自分の能力でできる適切な無力化方法、魔力・気の感知や分析、隠蔽能力、

そして、ヒトと獣、それ以外の気配を読み分ける技法等を編み出しついでた。

また、戦場で自身の能力を封じ、生き延びるために泥水を啜らなければならない、

そんな極限状況まで自分を追い込み、生き延びる手段を実際に体験もしてみた。

地形の利用、死体に紛れること、原始的ながら基本的な応急手当、etc……

それから、新技の実験で地形を変えてしまったり、滅びかけの集落を救つたり、そんなことを続けながら数世紀過ぎた。

そつこつしている内に、久しぶりに大きな出来事に巻き込まれた。中国で気の能力を応用、発展させた仙術操る、仙人集団の歴史への干渉……  
封神演義の始まりである。

いや～、この時代が殷周易姓革命の頃だとは思つてなくて、氣紛れで道具の改良を手伝つていた相手が、まさか仙人達だったとは……いつも渾名で呼んでいて、名前をちゃんと覚えてなかつたからね……ちょっと反省。

しかも、それに気付いたのが人造人間の作成で、名前が？？<sup>ナタ</sup>だつたから……不覚。でもそのおかげで、この世界が封神演義（藤崎作の漫画版）ではないことが判明。

藤崎版の女？との対決とか、マジで遠慮したい。あの鬼火力に、魂魄の分裂による無限増殖、

魂魄時は通常攻撃無効……無理ゲー過ぎる。

いやー、ホント戦わずに済んで良かつた良かつた

それにして、この??、妙に性能が高すぎる気がする。

いや、私も手を加えているから、性能が良いのは当然なんだけど、想定の数倍を超えるスペックつておかしすぎる。

なんか、部外者の私を妙に警戒してるみたいだし…………いつたいどういうこと？

まさか、ね〜〜〜こんな早くに?

side : ??<sup>ナタ</sup>

眼が覚めたとき、俺は複数の人を取り囲まれていた。

この生において、俺は竜王の怒りを買い、母のために自害したのは覚えている。

自分の名前、家族構成、周囲の状況などから、恐らく封神演義の時代で、

自分は漫画では人造人間だった??なのだろうと理解はしていた。

ならば、後々復活はできるはずだし、生まれが異常だつたらしい自分にも、

分け隔てなく愛情を注いでくれた母に迷惑はかけたくなかつたから、特に躊躇うこともなく自分の身を裂いて、死んだ……はず。

ということは、現在は太乙真人に蓮の化身として復活させられたところか?

でも、どう見ても他所の人間っぽい三人組　白衣に眼鏡の蒼髪少女と、

その妹分っぽい黒髪と白髪の双子?　らしい幼女　が、  
太乙真人?　と思しき男と一緒に話して居る。

……いつたいど「い」ことだ？

「い」は封神演義の時代、若しくは世界じゃないのか？  
あ……えと、まさか、他の……転生者……か？  
いや、まあ、この中の中身がばれなければ心配ないだらう……たぶん。

読心術等を取得している奴なんてそういう居ないだらうし、  
もしされたとしても、誰彼構わず敵対するつもりもない。  
話が分かる相手なのかもしれないのだし……

side end

とりあえず、思い切つて聞いてみることにした。  
どうせスペックがバカ高いと言つても、生まれたばかり。  
チートの類があつても、すぐには使いこなせないだらう……油断するつもりはないし。

それに、此処には私の知り合いがたくさん居る。  
やつこさんが暴走したということにすれば、  
太乙の馬鹿のせいということで、すぐに協力も得られるだらう。  
自己研鑽の塊みたいな仙人の中には、戦闘技能を高めている奴も居て、  
そういうつた連中の戦闘力はバカに出来ない。  
それに加えて、自分の能力を試したいという欲求も強い。  
彼らに声を掛けたら一発だらう。そして、皆でフルボッコに……  
うん、「戦いは数だよ、兄貴」ってやつだね。

「というわけで、私の質問に、はい、か、イエス、でお答えください

「…………それって、もう確信しているんじゃないのか？」アントンタは

「うーん、まあ、7、8割くらいであたりだと思つていいよ。いくらなんでも、出力、身体の耐久力、気、などなど、どれも想定されているものの数倍、酷いものでは十倍近い数値をたき出している。

……更にまだ伸びる気配もあるし。

いくらい私といづれギュラード関戻したとしても、この結果はおかしくすぎる。

ということで、改めて聞くけど、あなたは一度死んで、自称神様に会つたことがあるよね

「…………ああ」

「それで、あなたは何を望む？　ちなみに私は…………何がしたいんだろ？？」

あまり自分の未練とかについて、考えたことはなかつたわね。

……そもそもあの神に問答無用で転生を選ばされたようなもんだし。

うーーーーん…………とりあえず、原作も分からないし、後味悪い思いをしない程度に、

自分のやりたいことを貫ければ、それで良いつて感じかな？  
要らんちよつかいかけて来ないなら、いつの目的とかち合わないなら、

何してくれたつて構わないんだけど

ピンチと空気が張り詰め。

そんな中、転生者の無表情な少年が問い合わせてくる。

「…………それで、敵対するつて言つたら……どうする？」

「叩き潰すよ」

即答した。

私は全てを背負いきれるなんて思つてないし、敵対した相手に手加減できるほど、経験を積んでいるわけでもない。特に、この世界の人間に比べ、突出した能力を有するはずの転生者相手なら尚更。

自己中心的と言われようとも、まずは自分の身を守つて、それから他人を助ける。

自分の身も守れない奴が、他人を庇いきれるわけがない…………共倒れになるだけだ。

それに、身内ならともかく、敵対している相手まで助けようと思つほど、

私はお人好しではない…………どこの漫画の主人公じゃあるまいし。

「…………自分の目標はまだハッキリしない、‘これだ’と断言で  
きない。

ただ、アンタとは敵対する可能性は低そうだ……

けれど、自分が先輩相手にどの程度戦えるものなのか、見極めるためにも、一戦、お相手願いたい」

なんていうか、素直な熱血系みたいだ。

こういう子つて、どう相手すればいいんだろう？

嘗ての知り合いには一人も居なかつたタイプ……

ちなみに、こっちに来てからの知り合いでも熱血系は少なかつた。

こういうタイプって、相手するまでしつこそうな気がする。

暑苦しく迫ってきて、とか……偏見かもしぬないけど。

「あんまり手の内見せたくないんだけどな……はあ」

「それは、了承してももらえたとみて良いのか?」

「あー、うん……断つても付きまとひきそつだし(ボソッ)」

「ありがたい」

「無表情ながら、ビニが嬉しそうだ……もしかして、バトルジャンキー?」

「とりあえず、場所を用意するかい。」

「こんな実験器具や工作道具が置いてあるところで暴れたら、太乙が泣く」

「ああ、了解だ」

模擬戦のために用意したのは、

結構な高空に、浮遊する柱を足場として百本近く並べた空間。

ある程度の高低差を付けてあり、立体的な戦闘も可能。

一応結界で隔離してあるので、流れ弾の心配もない。

下手に地上でやつあつと、被害が馬鹿にならないために用意された鍛錬場だ。

人外レベルのぶつかり合には、地上を耕し、山を均し、川や湖を蒸発させてしまう。

今回は、基礎能力を調べるために、双方無手で、気や魔術は最低限に。

私も素の自分がどれだけ戦えるか気になつたので、インとヨウは纏わず、離れた場所で見学させている。

白衣を脱ぎ捨て、伊達眼鏡を放る。そして

「それじゃ、始めようか」

私のその言葉で模擬戦が開始された。

彼は一気に核の出力を高め、柱を蹴り碎いて加速、そのまま勢いに乗つて、全力で殴りかかってきた。予想していたよりも、出力の上昇が早い。体捌きは荒いけど、それを補つて余りある力。

「ああああああああああ！」

ゴゴッ！！

かわした先で、<sup>ナタ</sup>？？の拳が柱の一本を粉碎する。

魔眼を発動させ、相手の状態を解析してみると、

現在の出力は想定の7倍、常人の30倍強つて所か……

生まれたばかりなのに、これは破格の戦闘能力。

おそらく、このまま力任せに戦つたとしても、

この世界の中の上々位には入れるだろう。

……ですが、チートだ。

い。  
自分の場合、下手にガツチリ組み合つてしまふと、力負けしかねな

素の自分の身体能力は、特にチート強化しているわけではない。自身の意図と寸分違わず動作することが出来るが、それだけだ。気や魔力に依る強化や、改良を続けた治癒能力を除けば、筋力、骨格強度といった出力・防御力は、ちょっと鍛えただけの一般人クラスでしかないのだから。

(うつそだー。主様の場合、ちょっと、鍛えたってレベルじゃないよ)

（はい、かなり、でも足りません。確実に、限界まで、か、それ以上……）

敢えて表現するならば、‘異常に、鍛えています’

(だーーっ！ もうつ、戦闘中のモノローグに茶々を入れるなーっ  
ーー)

（（はーいつ））

まつたく、返事だけは良いんだから……  
ずっと三人だけだったとしても寂しくな

「あ、危なかつた、まともに喰らつてしまつところだつた。」

「う、せん、まう、じ」と

柱の中をヒョイヒョイと飛び回りつつ、基本的に回避、

偶に攻撃してくる相手の腕を取つて、合気の要領で柱に叩きつける。

がなかなか飲み込みが早く、

一度喰らつた攻撃に対する反応がどんどん良くなつていいく。  
それによつて、回復、と云ふか再生？ 速度も半端無く、

一ノ谷が生田川に注ぐ

一度はもろに頭を打ち付けてたこのたゞ血を流してたのに

瞬時に、とまではいかないまでも、あつとこう間に治

繰り返しでしると打撃に対する耐性でも一についたのか

殆どダメージを感じさせない動きで起き上がつてくるようになつた。

なんていうか、チートを相手にする不毛の一端を垣間見た気

が  
す  
る。

九月三十日

私は」いつを鍛えたいわけじゃないのになあ……シケシケシケ

「くわ、おとむに相手する必要もない」と、そう話したいのが、なうが、本領を出させてみせる。

「いやいやいやいや、そんな、手なんて抜いてないから。本気で相手してるよ？」

だというのに、なんか無駄に勘違いして気合を入れていて彼……

「こつちは身体能力そんなに高くないし、

体術系での必殺技の類も持つて無いから、こいつやつてずっと受け流

シハニヌのヒ

それを、そんな手抜きみたいに考えられても……いつたいどーしろ

つて、あ、なんか気がやばいレベルで拳に集中してる。

そのままひづれにきた――――――!?

「ウチの姉妹達は、おまえのことを喜んでるみたいだよ。」

仕方が無いので、襲い来る拳を紙一重で掻い潜り、呼吸を合わせてすうっと相手の懷に入る。

それにも、おつそろしい威力……当たつてないのに頬が裂けるとか、ないわー……

でもまあ、これで詰み、のはず。

り込む。

一秒、一秒、一秒

しばらくバタバタ暴れていた  
り回された が、  
首の力だけでこっちが身体」と振

あつさり絞め落とせた。

ナタ  
氣絶した？？を担いだまま見学エリアに飛び移ると、  
インとヨウが飲み物と手ぬぐいを持って駆け寄つてくる。

「お疲れ様です、主様」

「お疲れー……ねえ主様、決まり手は絞め落とし?」

「相撲じやないんだから、決まり手つて……」

成長と共に、私との繋がりが強化されていくらしいこの娘達

は、

最近では勝手に人の思考を呼んだり、私の嘗ての記憶から、ちょくちょく要らん知識を引っ張つて来たりするよつになつて來た。

こんなネットもパソコンも無い時代に、

2 ヤンのネタとか……今の時代の人は絶対ついていけないぞ。

此間なんて、「SUMO」を再現しましょうー」なんて言ひ出して

地球への被害がヒドイことになりそつなので、すぐに却下しました  
が。

いや、まあ、私もアニメや漫画の武器を再現したりしてゐるから、あまり人の事は言えないんだけど。

#### 閑話休題

「で、見ててどうだつた？」

「うん、想定以上の出力が確認できたから、  
暴走する可能性も考えていたけど、かなり安定しているね。  
さて、これから改修計画を上方修正しておかないと……ふふふふ  
ふふふ」

マッドサイエンティスト  
太乙真人が危ない笑い方をしている。

まあ、気持ちは分からぬでもない……魔改つて心が躍るよね  
まあ、敵対する可能性が全く無いとは言い切れないから、  
強化するとしても程々にしておくつもりではいるけど。  
というか、どちらかと言えば、ガチ強化よりもネタギミックを仕込  
んでみたい。

ロケットパンチとかドリルとか、眼からビームとか……

「口ケットパンチは捨てがたいわね。あとドリル、ドリルは絶対にはずせないわ！」

「いえ、どうせなら変形機能を……完全可変機ってステキですよね戦車形態とか飛行機モードとか…………はあ…………」

「ああ、確かに変形は男の浪漫だ」

「どうせなら変形よりも、ピンチの時にやつてくる支援メカとの合体機構！！

合体してパワーアップするのがいい！」

ヨウもノリノリでアイディアを出してくるし、インも冷静に見えて暴走気味みたいだ。なんかウットリしてゐるし……太乙真人も大分おかしいことになつていて、それはもともとの素質のせい。

きっと、私が色々ネタを教え込んでしまつたせいではない…………たぶん。

いや、巨大ロボットとかの話をしてみたら、物凄く食いついてきて、色々と洗脳してしまつた気がする……他の仙人たちも含めて。

ナタ  
「？」が氣絶しているのをいいことに、この改良計画は、悪巧み

ストッパーが居ないために、どんどんエスカレートしていく。

数ヵ月後

ナタ  
「？」は立派な改造人間になつていた。  
以下はそのスペック。

・チート能力（怪力・再生能力などが確認された。本人が黙つてるので詳しくは不明）

・眼からビーム発射可能。

・魔改造風火輪で陸海空を結構自由に移動可能

・手首をドリルに変形可能。

・肘から先をロケットパンチとして飛ばせる（乾坤圈の機能を内蔵した）

・骨格を組み替えて、戦闘機や戦車に変形可能（戦車砲や装甲などは宝具が変形して担当）

・支援メカ宝具（ガン ム×のGファ コンみたいな奴）と合体可能。

変形時も合体可能。変身時は似合わないから、と合体できない設定に。

・内蔵武器として、肩口に収納されているビー サーベルや、

胸部が開いて現れる大型荷電粒子砲。

腕部には火炎放射、ペンシリミサイルが格納されている。

・外見はぱっと見美少女の無表情気味少年。

若干長めの髪は赤毛で首の後ろで尻尾みたいに括っている。

・通常時はリミッターがついている状態で、解除すると正統派魔法少女（笑）に変身する。

変身時は核である靈珠（のダミー）が胸から顯れ、それが魔法少女の杖に変形？ する。

攻撃も、それらしいHフエクト（命中時や発射時に や の発光、鈴の音系の効果音等）

が入るようになつていて（改造に掛かった時間の8割が、これに費やされた）

ちなみに、本来の変身である三面八臂は「可愛くない」という理由で削除された。

「の話を聞いた時の？？は涙目だったそな。

改造手術が完了したその日。  
目覚めてスペックを聞いた？？の、  
ナタ

目覚めてスペックを聞いた？？の、  
ナタ

と、こう悲痛な叫びが、嵐壠山中に響き渡つた……

その後、その魔改造ホーテルを早速活用したらしに破壊の音と太乙のものと思しき絶叫が木靈した。

…少々やりすぎた、かな？

その後、少し彼を慰める？ 宥める？ のを手伝つてから、鹿島山を離れた。

あれから数世紀

い。  
大きな歴史の流れには手を出さないつもりだったけど、  
戦争に巻き込まれる無力な民衆を見捨てるのは、やっぱり後味が悪

ということで、出来る範囲で、圧政に苦しむ人々や、避難先を求める者を安全な場所へ案内したり、簡単な薬の作り方を伝えたり、効率の良い農業のやり方、盜賊などから身を守る術を教えて回った。

あれ？ こんな事ばっかりしているから、賢者伝説が広まるのか…まあ、いつか。

し。一応認識弄つて印象を薄めているから、細かい特徴は広まってない

インとヨウも自身の変化能力に慣れてきて、

童姿だけでなく狼や鷹の姿をとつたりしているから、伝説の内容が地域ごとに微妙に違つものになった。

「白と黒の獣を連れた」とか「白黒の従者を連れた」とか、酷いものでは「白黒の竜を連れた蒼髪の賢人」……

私、人（一般人）前でそんな自重しない行動はさせたことないのに

o r z

……ただ、一度だけ、人前で攻撃魔術を振るつたことがある。

一般人がまだ残っているにもかかわらず、

街中で闘争をおっぱじめた魔術師達にブチ切れてしまつて、

思い切り叩きのめしてしまつたのだ。

そのせいで「黑白の翼の御使い」なんて厨二くさい渾名も……マジで嬉しくない

いや、結構長居して気に入つていた街で、永らく面倒を見ていた娘が巻き込まれたし、

うちの施療院を、その面する通りごと思いつきりぶつ壊していく、その上、被害者の目の前で更に闘争を続けようとしやがつたから……裏の人間が、真昼間から一般人の前で、

堂々と魔術・呪術をふるつて喧嘩なんてしてるんじゃない！

と、カツとなつて、ついついやつてしまつたわけだが……

私の攻撃で大きな被害が出ずには済んで、ホントに幸いだった。

結局、その魔術闘争はいったん双方とも後退して、別の場所で仕切りなおしになつた。

その間に、近場に居た殆どの一般人が逃げ切れたから、結果的には良かつたが……

あとで、インとヨウにはみつちりと説教された。

「主様のお怒りはもつともですが、近くに民間人も居る状況で、そんな感情に任せてほいほい魔術を扱うべきではありません！！私達は主様の命には基本的に逆らえないのですから、もつと自分を律してください！」

もし加減をミスって何かあつたら、長々と後悔することになるのは確実です！！」

確かに、<sup>チート持ち</sup>私達転生者は下手をすれば世界を数回？ 滅ぼせる力があるのだから、

能力の制御、自己の管理をきちんとしないといけない、つていづのは分かつていていたつもりだつたけど……ちょっと甘かった。あとは……自分同様、ヒト以上の力を持つ異界のカミガミとの交流で、

気が抜けていた、つてのもあるかもしれない。いざとなつたら止めてもらえるかも、そんな甘えを抱いてしまって

……

せっかく、分割思考が出来る身なのだから、

感情を抑えた思考を常駐させるぐらいしておるべきだつた。

インヒュウがどんなに成長したとしても、

もとは式神でしかない以上、私の指示には逆らえない。

いつもお互に悪ふざけをするような関係だったから、忘れがちだけど……

私を止めることができるのは、今のところ私しか居ないのだと、猛省した。

知り合いの力ミダつて、いつまでも此方に居るとは限らない。  
アバター仮想体を失えばそれまでだし、

それ以前に、近くに居なければ止めようもない。

それからは、揺れる感情の裏側に、

分割思考を割いて作つた冷静な、冷徹な自分を常に置くようになつた。

様々な土地を渡り歩きながら思つ。

だいぶ、人間の勢力が拡大して来ている。

そのせいで住処を追われる獣や植物も少しずつ増えつつある。

人間の身勝手で滅びる種がこれからどんどん増えていくことになるだろう。

それはなんか勿体無いな、そう思つて、

動物植物達を避難させれる異界の作成に取り掛かることにした。

以前土地に封じた恐竜達も、いい加減に外に出してやりたいしね。

## 5話・魔改造、ひづせやるなら、徹底的に（改）（後書き）

さて、少しずつですが、原作に近づいてきました。

??として誕生した転生者も登場しましたし、

いろいろカオスな世界になりそうです。

それにもしても、封神演義は入れるつもり無かつたんですが、

……行き当たりばったりってホント怖いですね、先行きが見えない辺り。

それから、??の魔改造のアイデアを募集します。

自分で現在思いつく限り詰め込みましたが、

まだまだ物足りないと思う人は感想等で意見をください。

次回以降の登場時に反映させます。

それでは、また次回。

2010・10・08 後半部分を若干修正しました。

2011・08・13 改訂

設定変更に伴い、加筆修正しました。

特に、異世界関連の設定を大幅に変更したので、六話の展開も大きく変える予定です。

6話・ピーストライウナつた。rzn(前書き)

お久しぶりです。それから、お待たせしました  
よつやく、6話の投稿です

## 6話・ジーしてこうなつた。rzn

6話・ジーしてこうなつた。rzn

人払いの効果を持つモノ、内と外を分断するモノ、内側に外とは異なる法則を持ち込むモノ等、これまでに様々な結界を構築したことがあるが、外界と隔離された、それも恒常的なモノを創りあげるというのはかなり難しい

ネギまの魔法世界をイメージして、地球全域を覆うサイズの人造異界を目指に

地脈・靈域などから直接魔力素を取り込む方式を取り

要石として、みつちり術式を刻み込んだ石柱を打ち込む方法を考えたこの方式の問題点は、要石が一定数以上喪われると、異界が維持できなくなってしまうこと

誰かに発見されて破壊されたり、石自体が風化して刻んだ呪紋が失われたりする可能性を考えると、定期的に点検、修復する必要がある

……今まで個人で活動してきたが、魔術師なんかの能力を持つ人間も増えてきたし

そろそろ仲間を増やしていく方が良いのかもしれない

仙人達も、地上の争いにちょっかい出すのを控えているみたいだから、皆退屈してるだろうし

声を掛ければノリノリで参加しそうな予感

百年くらい掛けて、能力の高い人材をこつそりと集め

とりあえず小さめ、とは言つても半径数十キロの異界を試しに構築

更に百年くらい掛けて、研究・開発系の仙人や魔術師達と  
内部の環境パラメータを弄つたり、要石や地脈に掛かる負荷を調査

したり、術式の穴を埋めたり

そんなこんなしているうちに、名前の無かつた我が魔術？結社は  
『完全なる世界』と呼ばれるようになつていた

あれ？ こいつてネギまの世界？

結社が『完全なる世界』ってことは、私が『造物主』？

確かに、この世界の魔術（魔法）は精靈を介して発現させるものが

殆どだし

結社は異界＝異なる『世界』を造り上げようとする魔術結社だから  
あながち間違つた命名ではないのだが……どーしてこうなつたonz

気付ければ『完全なる世界』の盟主として祭り上げられており、私が  
凹んでいる間にも、

先代、先々代の意思を継いで結社に参加してくれた忠臣？達がやるべきことを進めてくれる

通常の魔術・呪術等の他に、仙人達との技術交流で仙術も取り込み、  
どんどん異界の改良が進んでいく

その上、技術畠の連中

特に初期メンバーの中でも変態級の幾人かは、仙術で寿命を延ばして未だに現役

更に、その後の世代も、なんというか凝り性な血を受け継いでいる  
らしく

斜め上方に向かって伸びる技術ばかり開発している

……なまじ腕が良く、何かしら使えるものを造つていてるから性質が  
悪い

いざとなつたら、馬鹿共の嫁に連絡すれば良いんだけどね

「あんたあ！ またバカなことやつてるんだって！…？」

「いや、これが完成すれば「それは他人さまに迷惑掛けますることなのかい！？」ひいいいつ」

いつの時代も、女（母）は強し

そうして出来上がった人造異界に、段階を踏みつつ各地に封印していた古代の生命を解き放つたついでに、足りない手を補うために生み出した擬似生命とでも言つべき、魔力で活動する存在を改良魔法生命体として異界の土地を開拓、開拓者として頑張つてもらっている

この魔法生命体が誕生する切っ掛け

それは研究者アホとも達が「猫耳娘サイコー！」だとか

「悪魔つ娘は私の嫁です（キリッ）」とか言い出して……いや、私が昔仙人達に教えた嘗ての燃え・萌え知識が、巡り巡つてこんな事になつたから

大本の原因は私つてことになる訳で、ぶっちゃけ自業自得なんだけど

という訳で、生み出された魔法生命体はあんな可愛い娘達（ついでに野郎共も）を、我々の勝手な事情で縛り付けるなんて

世界の宝『美少女』に対する冒瀧だ！ 等といった主張により異界関連の仕事が一段落した後、通常人類と変わらない扱いで解放されたまあ、機密に関わるような作業・研究には関わらせていなかつたから、というのも理由の一つであるのだが

ちなみに、この魔法生命体（通称・獣人・亜人族）は研究者好みのせいで

美少女率が高く、基本的に男より女の方が強い戦闘能力の簡易比較は

美少女・美女 < 少女・女性 < 幼女・男の娘・老女 < 越えられない壁 < 紳士 < マッチョ < 青年 < 少年・爺

と、この様になる

以下は、これらに携わった研究者達の台詞を一部抜粋したものである

「小柄な美少女が、でつかい得物を振り回している姿を想像すると……も、萌える……」

「女の子がマッチョに負けることなど、あつてはならないんだ！！！」

「紳士が幼女に勝つことができようか、いや勝てる訳がない……！」

「こんな可愛い娘が女の子な訳がワジガツベキハシヤツイキハシヤツ……【この研究者は修正されました】

「ふたなり盟主たん、はあはあハボグツガツビジツメキツグシヤツ……【この研究者】

その後、どうせネギまの世界なら、と  
火星のほうにも人造異界を構築してみた  
原作では、人造異界の寿命がどうのこうの、という話だったと思つが

こちらは『完全なる世界』の皆で、修理・点検・改良を続けていくことになっているから

たぶん、魔法世界崩壊の危機！　は起きないはず

地脈に打ち込んだ要石は定期的に術式を更新

各要石の更新はローテーションを組んで、常に八割以上稼動するようになります

また、靈地に植えた魔法樹から、それに共生させている魔法菌を介して

異界維持のための術式を感染させていく仕組みも作っているので最終的に、異界内の植物が全滅しない限り、異界崩壊は発生しなくなるはず

完成した地球の人造異界を、ナイトウイードから『裏界』、火星の人造異界はそのまま『魔法界』と命名

『裏界』は爬虫類・甲殻類系の魔獸　進化の過程で魔力を取り込んだ生命体　が多く

その生態系のトップに位置するのは、我らが眷属たる竜種であるこの仔達は、独自の魔術を発展させて、ついに人と殆ど変わらぬ姿をとることも可能になつた

勢いで一つも異界を構築してしまつて

領土を求める国や実験・研究素材を求める組織なんかに狙われかない『完全なる世界』は

下手に人材を集めることができず、使えるものは親でも使え、つてぐらいの人手不足なので

人型になつた竜種に『裏界』の管理を任せて、主要人員は『魔法界』側の管理に専念することになった

『魔法界』の方は、『完全なる世界』の人員が移住することも考慮して

ゴーフーンや不死鳥といった、人に狙われる希少性の高い魔獸に加

えて

騎獣等の生活の補助となる魔獸も連れて行つた

そのため、爬虫類・甲殻類系の『裏界』に対し、『魔法界』は哺乳類・鳥類系の魔獸が多くなつた

そのうち、魔女狩りにあつた魔術師達を避難させることになるかもしないが

しばらくは身内だけで、ゆっくりじっくり環境を整えていこう

そういうえば、そろそろイエスが誕生するのでは？ と思い出したので

希代の宗教家？ がどんな奴なのか、顔を見に行こう  
と、執務室に身代わりを残して、久しぶりに『魔法界』の『完全な  
世界』本部から脱走した

なんというか、組織のトップって書類仕事ばかりで、自由が無さ過ぎ  
ぎる

縛られたくないから、人類が発生してからも相当な間、個人（+式  
神s）で行動していたのだが

満足のいく出来の異界を造り上げるためとはい、魔術結社を組織  
してしまつたのが運の付き

側近達も仙術で寿命を延ばし、相当な経験を積んで有能なのが  
盟主の決済が必要な事も少なくないわけで……執務室に数十年単位  
で縛り付けられるはめに

まあ、最近は『魔法界』の調整もかなり進み、移住させた魔獸たち  
も土地に馴染んで

交尾、繁殖などのバイオリズムも落ち着いている  
それぞれの繩張りも、上手いこと収まつたようだ  
移してきた当初は、馴染みの無い土地に興奮し、荒れ狂い、誰彼構  
わず威嚇して

と、蜂の巣を突ついた様な騒ぎだったが…

そんな訳で、仕事も大分減つてきたので  
長らく連れまわして育て上げた竜種の元少女  
千歳（約400歳）に盟主代行を任せて抜け出してきたわけだ  
いや～、涙目で

「そ、ソウ様……そのようなことを為されでは、こ、困ります……」

なんて言つてゐる千歳は可愛かつた……思わず襲いそうになつてしまつたくらい  
どんどん寿命を延ばしてゐる竜種は400歳で人間換算20代半ば、  
成竜に成り立てだが  
数百年掛けてみつちり扱いた分、下手な中年の竜よりも有能だ

「まあ、長くても100年は掛からないと思つから」

「そ、そなんあ……私まで文官の方達に叱られます」

「心配要らないよ？ マスターは、覚えていれば、約束はちゃんと  
守るから」

「時々ポカミスやらかしますが」

「イン、ヨウ……弁護するか、貶すか、どっちかにしなさい  
ま、ホントに久しぶりの旅なんだから、大目に見て」

「うう～～～・・・はあ、分かりました……無事のお帰りをお待ちしております」

「うん、行つてきます・・・皆によろしく言つといて

あと、技術班に、あの計画やっても良いけどやるんだつたら、私が帰るまでに形にしようとアリタマで伝えといて

「はい、承りました。行つてらつしゃいませ、ソウ様、イン様、ヨウ様」

抜け出してしばらく経つた後、本部の方から側近達の怒号が響いた気がした

たぶん、組織の全力で連れ戻しに掛かると思うので幻術系では心許ない、と変化系の魔術で背格好、顔立ちまで変えて完全に別人に成り済ましてから、百数十年ぶりの地球へ渡った

途中、カエサルの戦いぶりを見物したり、アジアの方へ寄り道したりしながら、ベツレヘムへ

実際にそこでイエスが誕生したかは分からぬが、魔法が存在する世界

キリスト教関連で奇跡やら聖遺物やら出てきかねないつまり、伝承の通りの出来事が起こる可能性は低くないベツレヘムへの旅路では、余計な警戒をされないように年や体格を偽りローブを羽織り、旅の途中の易者を装つて、商人の一行に潜り込んだ

どんな感じなんだろうかとワクワクしながら、ベツレヘムへ到着

身籠つているマリアらしい人物を魔眼でじっくり見てみるとなんというか、胎内で精靈を受肉させているっぽい感じ厳密には自然界の火や風の精靈とは異なる存在みたいだけどいつたいどうやって……

空間にいっぱい居る精靈達に干渉して、実体に影響を持たせるだけでも大変なのに

それを、肉体を持つ存在にするなんて

いや、マリアが何かしたわけではなく、この精靈？ の方からマリアの中に入ったのか？

この精靈もじきについて、いろいろ調べてみると  
どこかへ繋がつてゐるらしいバス、受肉した身体に見合わぬ靈体  
インとヨウにも調査・解析を手伝つてもらつた結果、わかつたことは  
この精靈もじき、余所の異界から墮ちて来た存在らしい  
『完全なる世界』で造つた人造異界ではなく、完全な天然モノの異界  
キリスト教的な考え方からすると、神様や天使が居る天界・天国み  
たいな感じ？

そこから墮ちてきて、生き延びるためにマリアの胎を借りて受肉し  
た、というのが真相のよつだ

でも、原作では悪魔はちょいちょい出てきてたけど、天使の類は出  
てなかつたな

そんなことを思い出して、改めて、この精靈もじきと天界（仮）と  
のパスを調べてみたら

こぢらの世界との繋がりが薄い？ 門が開きにくい？ みたいで、  
干渉し難い世界みたい

ま、余計な連中がこっちに来ないに越したことは無い  
心配事が減つたということで、のんびり物見遊山に戻りますか  
また成長した頃にでも見に来よう

弥生時代の日本を覗いて、米の一部をこつそり病に強い品種に取り  
替えてみたり

南米やインド辺りに行つて、その土地独自に発展した呪術・魔術を  
学んだり

中国に行つて、ナタの所に顔を出したりした  
ナタには、魔法少女モードについて、ものすつつつつ  
……

「じく、文句を言われた

封神演義の頃、その当時、世界トップクラスの難易度の戦場を  
どんなピンチでも使わないように、ロミッターをはずさないようこ  
必死に、全力で、心の中で泣きながら、生き延びようと過ごして  
居たそくな…

最終決戦でとうとう使ってしまった時は

敵味方両陣営からの生暖かい視線が集中して、居た堪れなかつたと  
……いや、正直スマンかつた

魔改造する機会が目の前にあつて、ついカツとなつてやつてしまつ  
たんだ

反省している、でも後悔はしていない、そう言つたら思いつきり殴  
りかかられた…避けたけど

もうそれから、イエスが色々やらかして処刑されるんじゃなかつた  
つけ？

と思い出して、急いでエルサレムへ向かう

道中で、イエスの噂を聞いてみると  
流石に死者蘇生はしなかつたみたいだが、病気の治療に魔術的な要  
素のある行為を

‘奇跡’として大盤振る舞いしていたらしい

弟子達にも、分かる範囲でちょこちょこ継承させていたみたいだし  
そんなことすれば、神聖なる法術（笑）を独占したい神殿連中に睨  
まれるのは当然か

大抵、そういう俗物共は、権力の類と癒着してるもんだから  
権力に興味の無いお人好し達が、こうなるのは時間の問題だつただ  
ろう

半分精靈の、この世界のイエスが復活するかは分からぬけど、何  
かしら起こりそうな予感がある

……いざという時のために、竜種達を何人か呼んでおくべきか？

いやあ、ゴルゴタの丘に来てみたが……なんといつ信者の群  
やつぱり、宗教は面倒だ

それで救われる人が居る以上、宗教自体を否定するつもりは無いけど  
狂信者が発生したら、つまらない理由でやれ異端だの、やれ蛮族だ  
の、やれ神の敵だと言つて

あつさり虐殺、戦争の類が起こつてしまつ……宗教に寛容？　だつ  
た日本人を見習え、と言いたい

いや、日本でも、ちっぽけな理由でイジメや喧嘩が起きていたつけ？

それはおいとして：

兵士の数は十分みたいだから、まだ暴動は起きてないけど  
これ以上信者が増えて、一部が暴走し始めたら

周りの大人しくしている信者も巻き込んで、絶対に止められないま  
ま大暴動になる

助けるべきか？　でも、秘匿すべき神秘を大判振る舞いした以上  
またいすれ、似たようなことが起きそうだし  
善意の塊みたいな人だったら、止めたとしてもやめないだろうしな  
あ……

あれ？　なんでローマにも神殿にもイエス信者にも無関係な私が頭  
を悩ませているんだろう

ちっくしょー、何か起きたらキリストの十字架と神殿、ローマの宮  
殿に一発ずつ雷を落としてやる

目の前で落雷があれば、びっくりして動きが止まるだらうし  
いや、逃げようとする民衆の大パニックに巻き込まれる可能性もあ  
るから、やめたほうが良いか？

そんなことを考えながら、うんうん唸つてゐる間に  
釘で両手を穿たれ、十字架に磔にされているイエスの生命が弱つて  
いくのを感じる

召喚門でこいつ呼び出し、傍に控えさせている竜種の若者数人に  
暴動が起きた際の子供やお年寄りの救助を頼んで  
ロープの下でインとヨウを纏い、準戦闘態勢に意識を切り替える

そして

処刑役の兵士が

イエスの死を確認するため

わき腹に槍を突き立てた

その瞬間、空間が歪むのを感じた

イエスの死体を通じて、こちら側に何かが流れ込もうとしている  
例の天界が、イエスの存在を通じてこちらの世界の存在に気付いて  
彼の死体を触媒にゲートを開こうとしている？

何しに来る気だ？ イエスの死に対する抗議？ こちらへの侵略？  
上から目線で、こちらを救済するとか言い出すとか？ それとも、  
ただイエスの靈体を迎えて来るだけ？

何かが起こっているのに気づいたのか、処刑役は槍を手放し、そこ  
から離れようとしている

刺さったままの槍を伝つて、ゆっくりと滴る血が、ゴルゴタの丘に  
巨大な魔法陣を描き始める

正確には、血自体で描かれているのではなく、血から漏れ出る魔力  
？ に拠るものため

一般民衆には見えていないだろうが、少しでも力の素質のある者は  
起こりつつある異常事態に気付き始め、ざわつき始めている

そして、門が開いた

まず顕れたのは輝く光の輪

そして、放たれる光で表情をはっきりと見て取ることは出来ないが、  
頭部

巨大な純白の光の翼で包まれた身体

翼の隙間からは、白い衣の裾がたなびく  
全身を顕したところで

その三対六枚の翼を大きく広げた

何の力も持たぬ民衆は、自分よりも上位の存在に畏怖し、圧迫され  
抵抗力の低い幼子、老人から意識を失っていく

私の傍に居るということで、意識を奮い立たせ、気絶を免れている  
竜種達に

全力で民衆を避難、隔離結界を張るように指示  
何しに来たかは知らないが、こちらで顕現されるだけで被害が大き  
すぎる

たとえ善意であつたとしても、こつちにとつては厄介事でしかない  
早々にお帰り願おう

「行くよ？ イン、ヨウ」

「「イエス、マスター！」」

ローブを脱ぎ捨て、背の双翼を羽ばたかせる  
たぶん手加減できる相手じやない  
だから、久しぶりの全力全開！！

インの‘封印’で隔離結界を更に強化、‘吸收’で周囲の魔力を搔  
き集められるだけ集め

ヨウの‘增幅’‘解放’で身体能力、魔力、気を、高めるだけ高

める

とりあえず、門に押し込めるつもりでボディに拳を叩き込むが、呆気なく拳が相手の身体を通り抜けたえ？ 何今の……まさか、光って見えるのは、まんま光で構成されている身体だから？

じゃ、通常の物理攻撃は無効？

こちらの攻撃の意識を感じたのか、文字通り光速で降り注ぐ光の矢ちょ、マジで？ 矢が当たった所が高温のためか、融解して大穴に咄嗟に重力球を楯にして矢の直撃は避けたけど殆どの攻撃が効かないのに、そつちは攻撃し放題かよ……なんという反則的能力

ということは、重力系で光を削つていぐぐらいしか、取れる手が無い炎や氷で光を屈折させようにも、エネルギー量が違いすぎて止められなさそうだし

「ああ、もうつ！ 厄介なイン！ 重力全開！」

結界内に掛かる重力をヨウの、增幅、も使って数百倍に自分も動きづらい、というか身体が重いけど天使（仮）の光撃も速度が落ちるはず

無言で降つて来る光の矢、槍を斥力の障壁、重力球の凹<sup>デコイ</sup>で逸らしつつ相手の身体を削るために距離を詰める間合いを詰めての殴り合い、覚悟しやがれ！！

と、思っていたが

奴さん、なかなか器用な者で、近接戦闘においては

両手に構えた光剣、光楯に加えて、六枚の光翼でも攻撃していくる

手数が違すぎるのに、ヒットアンドアウェイを繰り返して少しづつ削っていくが、結界内の重力を操り更に相手の身体を削るために力を振るっているインは相手の身体？ の1割も削れないうちに、かなり消耗してしまった門が完全でないのか、顯現が不完全なのか分からぬが、出てきた所から動こうとしないけど

「このままじゃ、ジリ貧ね」

（も、申し訳、はあ、はあ…あ、ありません…）

「良いの、攻撃はヨウに切り替えましょうイン、貴方は結界の重力操作に専念して、できれば余力を蓄えておいて」

（（はい））

「光精よ、我が手に集い、全てを貫く刃と為せ」

ヨウの構成する鎧の大部分を解除、それらを纏めて身の丈を超える刃を持つ、巨大な両手剣に変化させる片刃の刀身には、みつしりと、增幅の呪紋を追加していく呪文を唱え、術式を構築、呼び掛けと魔力に精靈達が集い式と呪紋に沿つて、ヨウの刀身に重なるように光刃を形成していく

黑白の双翼に力を籠め、飛翔

肩に担ぐように構えた白の大剣を

相手の光剣・光翼を掻い潜りながら、一閃

振りぬいた勢いのまま、速度を殺さず姿勢を変え、更に加速して相手の背後へ

3メートルを越す光刃に、破断、の力を籠め

厄介な光翼を、まず一枚叩き切る

そのまま勢いで突き抜けてしまい、距離が開いたところに濃密な光の弾幕を放つてくる天使（仮）

全身を振つて方向転換、再度加速し、弾幕の散布界が広がりきる前に相手の懷に潜り込む

インによる荷重のおかげで辛うじて避けきるが、かすつた攻撃による火傷が痛む

先ほど断ち切つた翼に、光刃を槍のように突き立て、增幅、の呪紋を全力稼動

カシャー——ン、と硝子の割れるような音と共に、砕け散る羽

「やつぱり、許容量以上の力を注ぎ込めば、ダメージは『えれるみたいね』

（ですが、消耗戦になりますよ）

「こ」で止めとかないと、折角造つた『裏界』にも影響が出かねないわ

（竜種の里も、今は『裏界』だつて…それは、マズイよね）

「さて、こちらが力尽きるのが早いが、そっちが弾けるのが早いが・・・勝負！！」

斬つて、撃たれて  
刺して、焼かれて  
碎いて、断たれて  
弾けさせて、貫かれて

光と光の応酬を重ねて、かなりの時間が経つた

重力を弄っている空間での光速戦闘に、時間の感覚がおかしくなつてくる

相手の光翼は全てもぎ取り、胴体にも数撃、片腕にも喰らわせてやつたが

まさか、自分で肩口から腕を断つて

全身へ広がるうとするダメージを減らすとは思わなかつた  
おかげでモロに攻撃を喰らつて、焼かれた左半身は当分使い物にならない

翼で移動は出来るが、全身を使った斬撃は無理  
さて、どうしたもんか……と、インも大分回復したみたいだし、速攻で行つた方がいいかな

「イン、行ける?」

(はい!)

「ヨウ、私の道を切り開いて」

(りょーかいつ!)

ヨウの鎧を全て解き

更に巨大になつた大剣を突撃槍のよつに右腕に固定<sup>ラシス</sup>  
そこに残つた全力を籠める

面積の増した刀身に呪紋を追加

切つ先に、'破断' と斥力の楯の補助呪紋を

'增幅' と光撃の呪紋は、更に密度を上げる

「行くよー!」

‘破断’と斥力の楯で天使（仮）の弾幕の中  
私が通る、一直線の通り道を抉じ開けていく  
相手も止めきれないと感じたのか、残った左腕に光剣を構え

閃光が交錯した

白の大剣は、天使（仮）の胸元に突き立てられ  
天使（仮）の光剣は……空を切つていた

互いに貫き合いそうになつた時

ヨウが咄嗟に右腕と大剣の接合を切り離したのだ  
勢いに乗つた大剣はそのまま突き立てられ  
相手の光剣は、切り離された反動で姿勢を崩した私には当たらなか  
つた

刺さつたままのヨウの刀身の呪紋が

天使（仮）の許容量を超えるエネルギーを生み出し  
その身体を崩壊させていく

罅割れ、砕け、その隙間から光を放ちながら、崩れゆく

顯現させていた、依るべき身体を失い  
その靈体が還るべき場所へ戻つていく

「イン、封印」をついでに、イエスの靈体も還してやつて

（はい…行きます！）

力を失つていく天使（仮）  
でも、まだやることが残つている

黒の籠手に覆われた右手を、門の中心に叩きつける  
そこから、黒光が広がり、門の術式を‘侵蝕’していく  
門の術式の中心に位置するイエスの遺体も取り込み  
その機能を掌握、封印を開始する

( 術式への侵蝕率9割を突破、門の機能を掌握、イエスの靈体  
の状態・・・休眠状態を確認  
門の機能を一部反転、送還術式起動……3、2、1、送還終了、天  
使(仮)の靈体の送還……3、2、1、終了  
門の術式侵蝕完了、天界(仮)への接続を遮断、門の機能停止、な  
らびに術式の封印を実行…… )

血のよう赤い門の術式・魔法陣が徐々に小さくなつてゆく

(……97、98、99、100%…封印完了です)

異界への門を構成する術式は、なかなかの難物だった  
なんというか、術式に使われている言語が違つ、とでも言つのか  
例えて言つなら、単語も文法も違うもの  
それを掌握、封印するのは、ホント疲れた

「あーーー、もう、疲れたー……何でこんな厄介事が起るかなあ……  
それも、目の前で」

「マスター、お疲れ様です……傷は?」

「大丈夫、腕や脚を失うほどじゃないから  
それよりも、ヨウ、隔離結界を解放して……みんな心配してたるだろ  
うし」

「はーい…開けー」「マー..」

そつして開いた結界の外は

……龍種と『完全なる世界』メンバーで一杯だった

「…………」

「…………」

「…………」

一瞬の躊躇にも無く結界を再構成した

「……マスター」

「うん、私は何も見なかつた」

「マスター……」

「逃げるよ、イン、三ツ」

「マスター、それは……」

「……どうかと思ひ」

「だって、まだ約束の100年経つてないもの

「…………はあ～」

「いいから、やつをと行へる

「…………」

そして、彼らは転移した

魔力の供給が途絶え、結界が解放された時には影も形も見えず  
外で包囲陣形を布いていた、『完全なる世界』の部隊長は  
これから受けけるであろう、側近 + 文官達の愚痴と説教を想像し、ぐ  
つたりと頃垂れたそうな

ちなみに、竜種の皆さん、結界が開放されたときに無事な姿を見て  
「さすが、ソウ様だ」と、満足して帰つて行つたそうです

## 6話・ピーチの「うなつた。」（後書き）

中々書くネタが思い浮かばず、3週間以上も掛かってしまいました  
今後も投稿間隔が崩れることがあると思いますが、  
見捨てないでもらえるとありがたいです

それでは、また次回

12 / 8 誤字及び一部表現を修正しました

## 7話・日常 騒がしくも楽しむ日々（前書き）

お久しぶりです

7話を書き上げるのに、一月以上もかかつてしましました  
時間をかけた割りに、量も質も低下気味な感じですが……少しでも  
楽しんでもらえれば嬉しいです  
では、7話の始まりです

## 7話・日常 騒がしくも楽しい日々

7話・日常 騒がしくも楽しい日々

さて、イエス処刑騷動から数十年  
あの後、無事に『完全なる世界』でキリストの遺体を処理してくれ  
たらしい

民衆の記憶・認識処置も無事に終わり

「イエスの死と共に2人の天使が舞い降り、イエスを天に迎えた」

という感じに収まった

何故かもう一人の天使＝私らしき描写が混じっているが……気にしないことにする

それから、天使（仮） 三対六枚の翼から熾天セラフと仮に名付けられ  
た

の破片は殆どが靈体と共に還つたが、一部はこの世界に残つて拡散  
してしまつたらしい

支部に顔を出した際にその話を聞いて、自分も残つて後始末をすべきだつたかと少し反省した

邪神の時同様に、後処理を怠つたせいで、また厄介ごとを招いてしまつたかもしれない

回収できた一部の熾天セラフの破片は解析・実験にまわされ  
どうにか能力再現ができないか、と研究班の良い玩具になつている  
そうな

しばらくあちこちの古代の大國を流離つて、伝統技能なんかを習得

していった

漢では陰陽五行説が生まれ、漢詩や釉薬を使用する陶磁器も発展してきた

陰陽五行説は、まだまだ生まれたばかりの理論だから、術式の穴や無駄な記述もあつたが

リアルタイムで発展していく魔術理論を見ていくのは楽しかった自分でも改良、簡便化を行つて、問題無をそつなのはこつそりと公開するなど貢献もした

あとは、魔眼を活用して、あつちこつちの陶工達から技術の良いとこ取りをしたり

ナスカの地上絵が描かれている所を、ヨウの変化した大鳥に乗つて上空から見学したり

また、集落に潜り込んでその土地特有の布の織り方や風習、神楽など様々な知識、理論、技術をイン、ヨウにも学ばせて、識ることによる成長を促した

同じ法則に至るにせよ、其処に到達するまでの過程や視点はその属する文明、思考体系によつて異なる場合がある  
その違いを学ばせることで、多面的なものの見方が出来るようになる……はず

あつという間に過ぎた百年

確認できる範囲では転生者も現れず

自分は最近魔法界に引っ込んで大人しくしている

大人しくしていなのは研究班の連中で  
マッドサイエンティスト

百年前に許可を出した「えっちはいけないと私は思いますー」プロ

ジエクトでいろいろやらかしている

アーティスト

内容はご想像の通り、自動人形のメイドさん製作計画である

この時代では、未だにメイドという職業、衣装の類は出現していないので

お手伝いさん、家政婦の亞種と見なされているが

仕える主に忠実な、有能な女性というイメージのためか

『完全なる世界』の一部で、熱狂的な人気を誇るジャンルである

何故か男性のみならず、女性にも人気があるが…百合か？  
百合なのか！？

製作に当たって、そのコンセプトを、戦闘系の能力重視の「戦うメイドさん」とするか

日常の家事手伝い系を主目的とする「『奉仕系メイドさん（もちろんえつちな目的はありません）』」とするか

無駄な議論で熱くなり、開発メンバーは大きく割れた

頭脳の開発にしても、天然ビジッ娘を再現するためには、といった阿呆な理論を打ち立てる奴や

素直クール系メイドさんは絶対に再現すべしとの、メイドさんに必要なのは大人な包容力だとほざく奴

みんなして好き勝手に研究するものだから

規格の合わない思考体系の人工知能もどきがいくつも生まれることに個性を出せるだけの感情や思考能力を備えたものに、いまだ辿り着いても居ないので

気が早い連中ばかりである

ちなみに、ボディの方は某ライト…？ なノベルの侍女式自動人形を参考にして

ワイヤー・シリンドラーと鎖の関節、陶器とラバーの肌、油を血潮に造り上げた

流石に重力制御能力や人へと進化するボディはまだ無理だが  
簡単な命令に応えるレベルのものはできたので  
一部には単純なものだが、仕事をしてもらっている  
頭脳はともかく、身体は規格を統一できたので  
最終的には、共通規格の様々なオプションを運用できるようになる  
はず

『魔法界』に馴染んだ獣人、亜人達の中で、有能な人材を採用しているおかげで

万年人手不足は一応解消されてはいるが、裏切りなどの心配が無い  
戦力が増えるのはありがたい

特に事務系は給料は良くても使う暇なぞありやしない、と厳しい状態  
裏方で、華々しい活躍など期待できないために、皆入りたがらない  
のだ

それゆえ、このプロジェクト、他の部署があまり良い顔しなかつた  
のに対して

仕事がきつい 人気低迷 人が入らない 仕事がきつくなる  
の悪循環を突破できるのでは、と事務方で希望の星として全力で支  
援されている

「さて、今日も書類の山を片付けるとしまじょうかね」

「ソウ様！ また研究棟が…！」

「ゴー……ンと響き渡る轟音と、間をおかず飛び込んでくる千歳

「またか！ あの馬鹿共が……予算半減してやるつか

研究棟があつたはずの方向から聞こえてくるのは、爆発や銃撃？等  
の戦闘音と

等の叫び声

なんというか、阿鼻叫喚の地獄といった様子  
それにしても、あの仕置きはかなり効果があつたみたいだな……  
今後も活用するしよう  
かしそうだからなあ

「とりあえず、ストレス発散も兼ねて鎮圧しに行きますか？」

そんなこんなで数世紀後  
スクラップドブンセスの半自律型魔法も参考にし、『える目標を  
単純にし

まだ術式が重く、一定の処理が終わるまで次の行動に移れないし、

感情面も未発達なため

現在は様々な人と触れ合わせるために、補助役を付けて事務の受付係をさせている

研究棟に置いておくと、情操教育に悪い変人としか関われないし知らないのをいいことに、面白がつて大嘘を学習させそだだからだ無垢な子が、邪悪な知識に染まっていくのを見過ごすわけには行かないのだ……女の子だしね

小柄なボディをシンプルなエプロンドレスに包み、たどたどしく愛付をしている少女は

サクラと名づけられ、すぐに事務班のマスコットに

無表情気味だけど、仔犬みたいな雰囲気があつて

仕事がない時などは、トコトコと近くに居た誰かの後ろをついてくるまだ思考も幼く、無垢で、眼にするもの全てが興味深いのか、他人がすることは何でも真似しようとする

男子職員の後をついていき、トイレにまで入つていこうとした時は大騒ぎになってしまったが

ちなみに、そのついてこられた職員は「俺は無実だーーー！」等と叫びながら、女子職員に連行されていった

親鳥の後を付いて行く様な、真似する仕草の可愛らしさにやられてしまった職員は多く

コップを両手で抱えて一生懸命飲んでいる様子などは映像記録に撮られ、高額で取引されている

とある女子職員などは

「危うく「お持ち帰りーーー！」と叫んで自室に連れ込んでしまうところだった」

と息を荒げて呟いていたとかなんとか

それに悪乗りする形で、研究班が無駄に技術を凝らした犬耳力チュー  
ーシャが装備されることに

さすがに首輪は却下したが……犯罪者と紙一重なメンバーが多く  
いる気が

大丈夫なのか？ ウチの組織は……

いや、「Yes口リータ！ ノタッチ！」とか言ってたから大  
丈夫、大丈夫なはずだ

「はあ～～～お茶が美味しいねえ……やつぱり平和が一番」

「そーですのう……ずずず」

今日は久しぶりの『裏界』側との連絡会で、竜種の長老である遙樹  
翁とのお茶会だ

遙樹翁は今年で大体一千百歳くらいになるはずの最高齢の竜種で、  
結構お茶目な爺さんだ

ま、私からすれば、まだまだ子、孫みたいなもんだけど

「マスター……爺臭い、いや、婆臭い？」

「うつむいて、とにかく前回提案した話だけど」

「ええ、人員の余裕も出来てきましたし、十分可能だと思われます  
わい……世界の記録、

出来るだけ第三者視点から行う、可能な限り正確な歴史の編纂」

「私も自分が立ち寄った時代、土地の記録はとつていたけど、地球  
は、世界は広いから

個人で出来ることには限界がある……土地によつては文字や絵等での記録をとつていない所もあるし

戦争や侵略によつて記録が失われてしまつこともある  
どうせやるなら徹底的に……最近は平和すぎて、研究班と事務班以外はやることがだいぶ減つてしまつて

このままだと実働部隊や調査班の鍛度も下がつてしまいそつだからね

「各地に拠点を設けて……干渉を避けるためにも、その存在は隠しておくべきでしょ？」

「そうだね、下手に現地の権力者に目を付けられて私達が原因での戦や騒動が起きては本末転倒な訳だし」

「ついでに各地の魔術結社等にも幾人か潜り込ませるのはどうですかのう？」

色々と魔術や技術も盗めると思つのじやが

「おひ、それは面白そひ……それじゃ、一こんなのはどうかな？……」

「おお、それはそれは……」

……

……

大雑把ながら、計画の骨子ができたため、一息ついていると

「ソウさまーー」「ソウさまだー」「あー、インセムとアウセムも

いるー

仔竜たちが遊びに来た

結構賢く、入ってはいけない空氣とか敏感に察知して余所で遊んだりするけど

甘えるべき時にはとことん甘えてきてくれる可愛い仔達  
たまに悪戯でトラップなどを仕掛けてくれるけど、わざと引つかかってあげるのも楽しい

「ソウ わ まー、おはなし し てー」 「おはなし、おはなしー」 「ソウ  
わ まー、じゅ び で おつ き な い わを ふ き と ば し た つ て ホン トー？」 「  
まえの、じや し ん さん と の けん か はー？」 「ぱつ か、い わ じ や なく  
て や ま だ つ た るー」 「や ま を こ な じ なー？」 「ビー な つ た のー？」  
「アウ わ ま い ソ ウ ま の だ い ほー けん の つ づ き はー？」 ……

邪神や大冒険の話はともかく、流石に私でも、小指で山一つ吹き飛  
ばすのは無理…

いつの間にか話が大きくなっている……でも、子供達の期待を裏切  
るのは……

見ないでー、そんなキラキラした純真な眼で見ないでー……

結局、こつそりアウの、増幅、を用いて、小さめの丘を実演で吹き  
飛ばして見せてあげることに  
でも……また、話が大きくなつていくんだけつなあ……これから  
どうじょ

そんな感じの連絡会から始まつた歴史編纂

数年に一度の報告会では、色々とその土地独自の道具、作物、料理等

実物を見せてくれたり、振舞つてくれたりするものだから、現場に出ず、本部に籠りきりになつてゐる事務系のメンバーにひとつも、良い息抜きになつてゐる

出来事を書に記すだけでなく、資料として物品も収集している  
各国の書庫に潜り込んで文献の複写をとつたり、貴重な芸術作品などもコピーを保存している

物を長期間、場所をとらずに保管できるという点で、魔術が便利すぎる改めて実感した

劣化を防ぐために、原作の魔法球のように時間の流れを弄つて  
部屋の壁に呪紋を刻んで、保存するための空間を拡張する  
修復関係も、魔術無しの場合より効率的……型月世界でなくて良かつた

アツチの魔術だと、手間をかけて、科学でも再現できるものを行つ  
?だつたはず

それ以上は魔法として、扱える者が限られてしまう  
それに比べて、一応才能の有無はあれど  
補助魔法具も存在し、大抵の術者が一定以上の効果を得られるネギ  
ま式は使いやすい  
高性能な個よりも、中程度の性能の多の方が組織としてはありがたいのだ

「それにしても……ウチの魔術も大分節操無いなあ」

和洋折衷?な呪紋、術式が刻まれた保管室を見回して呟く

「ケルトやルーン等の西洋魔術に、五行思想といった東洋魔術に仙術、南米・アフリカの呪術などなど」

「世界各地の技術を盗み、取り込んで昇華させているものね」

「ねー」

「ま、余所はまだ感覚的に扱われている感じだし、奥義として秘匿されたり、個人技能として扱われたり… 組織立てての分析・改良を組織的にやっているのはウチくらいのもんだよね

……どつかに自慢しに行きたい、ウチのメンバーの優秀さとか、技術の効率の良さとか…」

ふと、子供みたいな自己顯示欲?な衝動に駆られて、どこ辺りならばらしても問題ないかな?

などと、一瞬本気で思考する

が、

「ちょっとちょっと、マスター、落ち着いて」

「そうですよ、それに自慢するとしても、変態と紙一重なメンバーをどう紹介するというんです?」

「そーいえば、やうだつた」

頭の片隅に残る冷静な思考と、武神♂の制止に

今ばらした場合のデメリットと、ウチの面子の濃さを思い出して、少々凹んだ  
……なんで、こんな変人ばかりあつまるのかなあ  
いや、実力は申し分ないんだけど…………もうちょっと、もうちょ  
とまともな人材が…

「たぶん、トップからして変人だから」

「上に翻えつて感じでじゃないかなー」

モノローグでの嘆きにまで突っ込まれ、撃沈された

7話・日常 騒がしくも楽しい日々（後書き）

少々短めですが、なんというかネタ切れ気味でして  
いつそ時間を飛ばしてしまうべきか、本気で悩み中です  
もうしばらく更新のペースが落ちた状態が続きそうですが  
気長にお待ちいただけたとありがたいです

## 8話・鬼・悪魔・人でなし？（前書き）

今回は早めに仕上げることができました  
それでは、8話の始まり始まり……

## 8話・鬼・悪魔・人でなし?

8話・鬼・悪魔・人でなし?

うーむ、西ローマが滅んだ後も、順調に発展を続けていた東ローマでは、文化事業も大分活発になつてきたなあ……

これまでの歴史の流れから見て、記憶にあつた世界の流れと大筋は変わらないみたいだから

たしか、もう数世紀後には『聖像破壊運動』があつたはず……複製の作成・収蔵もペースを上げさせておかないと

北魏の雲崗石窟については……あんなでっかい作品、どーしようか……流石に原寸大は無理だよね

以前に、似たような超大型作品つてあつたかなあ……現場では、大型作品の縮小スケールを統一すべきか

収蔵の際に整理しやすいように、作品毎に変更すべきかで意見が分かれているのか……

スケールを統一した場合、今後更に大きい物が出てきた際の保管庫の……

…………

「…………さて、今回はここまで?」

歴史編纂プロジェクトの一環の美術品収集、その未決済の書類を片

づけて、大きく伸びをしながら千歳に尋ねる  
あ、ボキボキ首の骨が鳴つてゐる……最近引きこもつて書類仕事ばつ  
かりだつたしなあ

「はい。今の所、特に急ぎのものはありませんので」

「うん、ありがと……イン達は?」

「現在、研究棟で実験の最終チェック中のはずです」

「そつか、なんとか間に合つたね……過去の魔術を解いて、より良い形に編みなおす  
そんな風に新しく構築した理論に基づいての初実験。見逃したら絶対後悔するものね」

執務室を出て研究棟の、耐魔・耐爆・耐汚染仕様の第四大型実験場へ向かう

現在、第四実験場では、新しい魔術理論の実証実験が行われようとしていた

その床面にはびっしりと呪紋が刻まれ、精緻な魔法陣を形成している  
壁面にも細かく術式が刻まれ、不測の事態が起こった際  
実験場内を外部と魔術的・物理的に隔離出来る仕組みである  
魔法陣の各部には、既に幾人もの高位魔術師が整列し、呪文の詠唱を開始している

また、強化硝子で仕切られた隣の観測室では

情報処理特化型の自動人形たちが、実験場内部の状態を事細かに記録している

足早に観測室に入るなり、イン達に尋ねる

「……状況は?」

「術者が配置につき、魔法陣に魔力を通し始めた所です」

「あと、約20秒で基礎呪紋の励起が完了して、第一段階に移行するよ!」

「星辰の配置も問題ありません」

「基礎呪紋の励起を確認、第一から第四までの隔離結界及び第一から第三までの拘束呪紋への魔力流入開始しました」

「探査呪紋の起動を認識……次いで、接続呪紋の励起準備を開始します……」

高密度で刻まれた呪紋を順に魔力が流れ、その効果を次々に発動していく

同時に高位術者によつて唱えられている補助呪文が、術式を加速させる  
イン、ヨウ、自動人形達がその展開していく様を観測、報告を重ね  
ていく

「対象の異界、通称『魔界』を認識……接続開始」

「……接続呪紋の完全起動を確認!」

「空間歪曲術式発動開始……開門呪紋へ回路接続」

「<sup>ゲート</sup>門開きます……4、3、2、1、開放」

魔法陣の中央の空間が歪み、暗い、冥い孔が姿を現す

「<sup>ゲート</sup>門と召喚術式の接続を確認」

### 「対象の固定化を実行」

魔法陣中央の呪紋が光を放ち、孔<sup>ガード</sup>門を中心とした空間に立体魔法陣が展開する

その球形の光が大きく拡がり、そして……弾けた

中から現れたのは、影がカタチを成したかのような、冥い、黒い、  
あおぐろ黝い、人ならざる存在

背には蝙蝠の様な翼、山羊の様な頭部、獸の下半身に蛇の尾、両腕は太く、鋭い鉤爪を備えている

### 「ワレラヨビダシタノハ、キサマラカ」

強者としての威圧感を滲ませながら、静かに問いかけてくる魔術に返されたのは

「よつしゃー！ 新理論の正しさが証明されたぜ！」「今夜は宴だ、ひやつは——！」「ボーナスゲットー！」

といつた興奮した叫びと

「なんだ、ただの悪魔か」「ちつ、リアル悪魔つ娘じゃないのかよ……」「やはり、身体構造転換術式を仕込んでおくべきだつたか」「はあ……期待してたのになあ」「次からは術式に色々仕込んで、対象選択に、美少女、属性入れようぜ」

などの冷たい？ 言葉……

予想だにしない反応に呆気にとられたのか、悪魔はポカーンと口を開けている

観測室の方では、実験の影響確認で忙しいために、完全スルーである

「言語変換もそこそこ上手くいっているみたいね……周辺への影響は？」

「全隔離結界、及び全ての拘束呪紋は問題なく発動しており、確認できる範囲では影響は見られません」

「詠唱・呪紋起動を担当した各術者への魔力逆流・呪力汚染もありません」

「対象の母体世界との接続状況は？」

「……異界との接続維持を確認……接続呪紋も安定しています」

やつておぐべきことを済ませ、観測室から実験室に移ると、悪魔がジロリとこちらを見た  
適度に身体を弛緩させ、すぐに動けるように構えている  
思っていたより力量のある悪魔だつたみたいね

「…………キサマガココノアルジカ」

「ふう……お待たせしました。ここにこの代表やつてます、ソウといいます」

「…………ナーラモトメテ、ワレヲヨビダシタ」

「新しいやり方で、きちんと召喚が行えるかの実験よ

「アタラシイヤリカタダト……タシカニ……コノヨウナマホウジンハ、  
イママデミタコトガナイガ  
アラタナショウカンジユツヲウミダシタトイウノカ……カノ、ソ  
ロモンオウイライノコトテハナイカ」

「あら、あの爺さまを知つてゐるの？」

「フム、キサマノシリアイデモアツタカ……ヤハリ、ミタメドオリ  
ノネンレイデハナケゲブオアツ！」

「女性に対して年齢のことを指摘してはいけません……ま、私は普通の女じゃないからこの程度で済ませてあげるけど」

「ゲハツ、ガツ、ハアハアハア……ナントイウキョウボウナオン  
ングボアアツ！…」

ちょくちょくと要らんことを口走る悪魔に、ボディブローを立て続けに叩き込む  
まったく、失礼な悪魔だと思わない？ と同意を求めて周囲を見回すと、みんなして顔を逸らした  
インヒヨウなどは腹を抱えて爆笑している……私の味方は誰も居ないのか、と少し凹んだ  
気を取り直して、会話を再開する

「まあ、新しい理論と言つても、過去の術式を比較・分析して、最低限必要な構成要素を抜き出し  
それを元に、より効率が良くなるような術式の並べ方、その法則を  
調べ上げただけ  
目新しい技術としては、依巫などの靈媒に憑かせるのでもなく、生

贊の血を元に実体化させるのでもない

こちらの世界での行動を可能にする肉体を、魔力を用いて編んだくらいのものね

過去のと比べると、魔力のロスが減った分を現界のために用いているから、負担はあまり変わらないけど

生贊や靈媒を準備しなくて済む分、手間は大分減ったわね

「ホウ…コノカラダハ、キサマラノマリヨクテキテイルノカ…イワカンヲカンジンナ」

「それは良かつた。ま、強力な攻撃魔法を受けたり、無茶な運用をすると崩れちゃうけど  
体が解けると送還術式が発動するようになっているから、滅ぶ心配はないと思つよ……たぶん」

「…………タブン?」

「だつてこれ、初めて使用する術式だから」

「…………」

「とこうわけで、一回でかいの喰らって還つてみてくれない?」

と笑顔でお願いすると、悪魔の奴は失礼なことに

「ソ、ソノヨウナオソロシイコトヲシヨウツルトハ、……サテハキ  
サマ! —ンゲンデハナイダロウ! ! ?」

「失礼な。それに技術の発展には、犠牲は付き物なのよ?

上手く送還術式が起動しなかったら、きちんとこちらで発動させて

あげるから……計算上では間に合ひませうだし

「オニ！ アクマ！ ヒトデナシ……！」

「悪魔は貴方じゃないの……」

必死に逃げようとするが、こんなこともあるつかと、魔法陣に組み込まれていた四重の隔離結界で逃げ場を塞がれ三本の拘束呪紋にギツチリと縛り上げられる

助けを求めて必死に周囲を見回すが、そもそもここに居るのは魔術や科学に魂を売り払った研究者マッドサイエンティストだけである

皆イイ笑顔で手を振っている

「ヒイツ！ タ、タスケ……」

周囲の実験機材への影響を考慮して、小さく絞り込まれた重力球が魔法陣の中心に発生

指先ほどの大ささの黒い点が、一気に悪魔の身体を飲み込んでいく

キュ「」

と空気を吸い込むような音とともに、悪魔の仮初めの身体は消滅した

「観測班！ 悪魔の消滅時のデータは？ 送還術式の発動は？」

「……発動までに多少タイムラグがあつたようですが、無事に発動しました」

「タイムラグ？ それで何か問題でもあつた？」

「少々痛く苦しい時間が長引いたくらいかと」

「ふーーん……それくらいならまあ、いつか」

残念ながらこの場に

重力魔法で潰される痛みや苦しみが長引くのが、そのくらいで済む訳ないだろう！

などといった、被害者側から見た常識的な意見を述べてくれるものは居なかつた

「さて、片付け開始！ 今夜は宴よ！ 事務の方に実験の成功を報告して、厨房にもね 材料の制限は無し、って伝えておくよ！」……あと、酒蔵も開けていいわ。秘蔵の奴を引っ張り出しなさい！」

「…………！」

「あ、余裕がある奴は、さつきの彼を再召喚してあげて…せつかくだから、宴に混ぜてあげましょ！」

その夜、『魔法界』の一角、『完全なる世界』の本部から明かりが消える」とは無かつた

3つの姿はヒトのものだが、最後の一つはビームが歪な印象を見るものにてえている

手も足も一対ずつあり、頭、首、胴と連なつてゐる身体もヒトのもとの変わらない

だというのに、まるで人では無いモノを無理矢理人型に押し込めた  
かのような、歪み、歪みを感じさせる

そんな奇妙な人影が、聞く者を恐怖に陥れるような、奇怪な声を発した

からうじて、人の言葉に似た発音が混じつているが、人ならざるもの  
の割合の方が多い

そんな相手の発声に、呆れたようにソウは言葉を返した

「もつと滑らかに喋れない？」  
出ると、発狂する者が出かねないの」

ソウに續くよつて、イン、三つも言葉を重ねる

「出来れば…姿の方も、もう少し歪みを減らしてもいいとあります」

「ヒトとの差異はそんなに大きくないんだけど……残っている微妙な歪みのせいだ  
妙に情緒不安定な気分にさせられるから」

「私達は慣れています…」というより、対応できていますけれど、その状

態で人前に出られると……」「

「… SAN値直葬される住民続出で、そのまま一つの街が滅びかねないかと」

「 - (\*・`・^M ぼづ力しい... + @ い〇トをヒツ...」

「…仕方が無い。出来るようになるまで、しばらく本部に籠つてもらおう」

……イン、対SAN値直葬眼鏡の配布状況は?」

「本部職員の93%に配布済みです」

「残りは現在本部外へ出張中だから、帰還時に渡す予定になってるよー」

「支部や隠れ家のメンバーにも現在の状況は通達済みですので本部施設内に無断で直接転移してくることは無いでしょう」

「それは良かつた」

みつちりと現在の地球のおおまかな一般常識、言語を教え込み人型への擬態、发声のトレーニングを繰り返した

その間、一部の通常業務が滞り、多少の損益も出てしまつたが邪神をそのまま連れ出した場合の被害を考えると遙かにマシだ以前に約束してしまつたのだから、面倒は最後まで見ないと……

最終的に、外へ連れ出せるレベルに到達したのは、半年も後になつてのことだった

そして、邪神という存在である以上、何事も無く予定通りの日程で進む訳も無く  
ホントに……ホントに色々な出来事があった

例えば、こんなことが……

「待てーっー！」

唐突に掛けられる大きな声

「邪神どもめ……」この俺が居る限り、地球に手は出させるものかっ  
！……」

高い寺院の屋根の上に人影が一つ……ここからだと、逆光でシルエ  
ットしか見ることが出来ない  
その人物が

「とうひーー！」

と屋根から飛び降りた

落下している間に、何かを早口で唱えていたようだ  
そして

天に光の円陣が浮かび上がった  
其処から零れ落ちるように、巨大な影が姿を現す  
素は神の紛い物、魔道の知識を持つて、外道を駆逐する、機械仕掛けの神……

この世界にあり得る筈の無い、強大な力

鬼械神である

外見はデモ ベインとリベル ギスを掛け合わせたような形状で背には巨大な翼、脚部には大きな装甲、鋭い鉤爪を備えた手、輝く鬚を振り乱す頭部を備えている

おそらく、邪神＝悪という彼の考え方そのままにこちらに向けて、その強大な力を振るおうとして

『完世觀光 邪神さん一行、『案内中』『聖地巡礼ツアーチ』

等といったプラカードや引率旗に気付いたらしく、固まつた

「…………あの～、そんな巨体で傍に立たれると、影になつて記念撮影の邪魔になるんですけど」

「…………」

「あの～～」

「…………あ…はい…………すいません…………」

興奮してしまつて、擬態が解けかけたり、周囲への汚染・侵蝕が発生したり……

そんな邪神達の、周辺に悪影響しかもたらさない問題行動を抑えるのに専念し

記念撮影の準備を済ませ…………気付いた時には彼の姿は無かつた

「さつきの…………いったい何だつたんだろうな？」

「さあ？」

「あとで、宿で待機してゐる盟主に報告だけしどくか

「そだな……それに、余計なことに気を向けていられるお密さん  
じゃないんだし」

「おう……撮影機の準備は？」

「完了したよ」

「わかつたわ……えへへ、それでは皆様、[写真撮りますよ～？  
足す一は～？」

「　　「　　「　　「　　「　　」　　」　　」

後でこの報告を聞いた時は、あまりの内容にテーブルに突っ伏して  
しまったが…

ちなみに、私達が宿で何をしていたかというと、  
インとヨウは、擬態が多少崩れてしまった場合等に騒ぎにならない  
よう、邪神をまともに捉えないように認識阻害の結界を  
私は、何か大きな邪神災害が発生してしまった場合、被害をこの街  
だけに止めるための隔離結界を

それぞれ構築するのに専念していた  
なぜ、直接邪神の傍に付かずに、こんな回りくどい方法を取つてい  
るかというと

邪神たちも多少は丸くなり？ また、能力に制限を加えるための強  
力な封印呪紋を編み込んだ布を纏つてもらい  
上級メンバーであれば、人数さえ揃えばある程度まで宥めれるよう  
になつたのに加え、

直接私が抑えに行つたとしても、まともに邪神を相手取れば、この地方一帯が壊滅するのは免れ得ないからだ

それなら、確実に被害が出てしまつとしても、街一つに抑え込んだ方が遙かにマシだ

そんな嫌な意味でハラハラドキドキな邪神達の観光旅行は、幸いにも大きな被害を出すことなく終わりを迎えた

チヨコチヨコとした被害は結構あつたけど

……本部滞在中の邪神関係の事故、事件による本部の修理費とか、職員の治療費とか、旅行の間の本部待機組の胃壁とか頭髪とか、旅行先の料理に感激した邪神の一人によつて、宿が一軒崩壊したこととか……あの時は、宿の女将への認識操作や建物の修復、周辺住民の記憶の齟齬が無い様に仕上げるのに、どれだけ苦労したか……

アレだけいろいろやつたんだから、しばらくなはにちは来るのを控えてくれるだろう

興味を持つたことを向こうつでも試してみる、とか言つてたしね

ま、終わり良ければ全て良し、だね  
そんなことを考えながら、机の上に放り出された写真の一枚を拾い上げる

‘にっこり’、というより、むしろ、ニタア、‘グバツ’といった感じの空恐ろしい笑顔の、しかし楽しそうな邪神たちが写つていて、代金もちゃんと貰つたし、これだけ楽しんでくれれば、計画を立てた側としても文句は無い

こんな綱渡りな旅は、もう一度とやりたくないけど

旅行中に現れた転生者らしき人物とか、懸念事項はまだ残っている  
けど

とりあえず……みんな、お疲れ様

## 8話・鬼・悪魔・人でなし？（後書き）

自分で書いていて、あれ……こんな流れにする予定だつたっけ？と首をかしげるくらい変なものを出してしまった気がしますあと、ネタが仄めると毎回、邪神さんの登場で凌いでいる気が……もつと精進します……未熟な作者をお許しください

とりあえず、時間をすつ飛ばすのは先送りにして、もう少し粘つてみようかと思つてます  
なので、原作の時代に入るまで、いつこつた短編集に近い感じの話が続くことになると思います

それから、今回の呪喚魔法など、この作品で扱われる魔術の演出は独自のものです  
実際には間違つたやり方である可能性があります。」了承ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5899n/>

---

不老不死の活用方法？

2011年9月1日13時30分発行